

---

# 幻想のアルカディア

kyoune

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想のアルカディア

### 【Nコード】

N1905J

### 【作者名】

kyoune

### 【あらすじ】

夏目飛鳥は毎日の受験勉強の日々に憂鬱を感じる、どこにでも居るごく普通の男子高校生。——しかし、？その日？はある時唐突に起きる。12月24日のクリスマスイヴの聖夜に、突然止まってしまった街の時間。同時に飛鳥は強烈な謎の頭痛を感じ、気を失ってしまうが……何だかんだで気付いた先は、『幻想世界』と呼ばれる謎の世界であった。そこで出会ったのは結界を操る女の子に、身体を武器に変える男。そんな中、飛鳥は次第に？資格者？として生まれた、自分の運命を自覚していく……。ファンタジーを舞台に

したバトル小説です。初作品ですが、よろしく願います。 第  
一章『序章編』（1話〜9話） 第二章『フォレスト編』（10話  
〜）

## 第1話　？イヴの夜に響く？

誰でも一度は考えたことはないだろうか。

実は、今俺達が住んでいる世界とは別に、もう一つ別の異世界がどこかに存在しているのではないか。とか、

現代の科学では観測できない遠い宇宙に、地球と同じような、もしくはそれより遥かに発達した文明を持った星が存在しているのではないか、とか。

それらはただの夢物語として扱われるが、絶対に「有り得ない」と証明することはできないはずだ。

もし実在するのなら、俺はそういう所に行ってみたい。

この忙しい日常の喧騒から抜け出して、そういった未知の世界を歩いてみたい――。

……と、思っていた時が、俺にもありました。

悲しいかな俺は生まれてから十八年もの歳月で、そんな夢物語は「ほぼ、というか99・9%有り得ない」という結論に行き着いた。普通に考えれば当たり前だ。

この世を支配する様々な物理法則。また世間の？常識？も相まって、高校三年にもなつて未だにそんなことを熱心に唱えている野郎は、もっぱら「電波」とか「変人」などと呼ばれたりするのが、ごくごく一般的かつ普通のオチなのだ。

受験や生活、果てはその先の就職まで目まぐるしい日々を追われていた俺は、いつしか子供の頃に持っていた、そういう？理想？を、すっかり忘れてしまっていた――。

## 第1話　？イヴの夜に響く？

「はい、じゃあ今日の授業はこれまで。各自復習をしっかりとしておくように」

教壇の前に立つ男性教師が、そう言っただけ教科書をパタンと閉じた。教師が教室から出て行くと、教室中の生徒達はそれぞれ背伸びをしたり欠伸をかいたりしながら、そそくさと一斉に帰り支度を始める。

「……あーあ、やっと終わったか……」

俺は口から気の抜けた炭酸ガスのような声で、小さく溜息をついた。

ここは都内の有名な進学塾の教室。

全国でも指折りの有名な塾で、そこでは圈内一握りのエリート学生が毎日のように集まって授業を受けている。

何を隠そう俺もその内の一人だ。

窓の外は既に真っ暗。時刻は夜の十時半。もうすっかり、夜空には大きな満月が眩く光を放っていた。

「おーい、飛鳥<sup>あすか</sup>あ」

ふと、後ろから名前を呼ばれた。

振り返ってみると、そこには同じクラスの友人達が携帯電話を片手でいじりながら、五、六人のグループを作っていた。

「なあ、俺らこれからカラオケ行くんだぞ。飛鳥も一緒に行かね？ どうせ明日は休みなんだし、今日はクリスマスイヴだろ。彼女いない男達で集まって、朝までパーツと騒ごうぜ！」

やけにテンションの高い男達からの遊びの誘いは嬉しかったが、明日のギッシリ詰まったスケジュールが目には浮かぶと、俺は直ぐさま首を横に振った。

「悪い、明日も朝から晩まで別の塾があるんだ。今日はパスな」

「えーっ！ クリスマスまで塾の予定入ってんのかよ！ お前の所はホント教育熱心だな……」

「……まあな。自覚はしてるよ」

俺は苦笑しながら鞆を手に取り、遠ざかっていく彼らに手を振った。

カラオケか……。

楽しそうだなと思いつながらも、俺はさっさと鞆に荷物を纏めると、近くのドアから教室を後にした。

自分で言うのも何だが、俺は割とどこにでも居そうな、ごく普通の高校三年生だ。

残念ながら、漫画やアニメに出てくる主人公のように特別に運動神経が良かったり、極めて特異な家系を持ったりしている訳でもない。ましてや杯を交わした兄弟が居るわけでも、生まれながらに人智を逸した超人的特殊能力を持っているわけでもない。

髪は親譲りの黒髪を少し長めに伸ばしており、身長は百七十六？。血液型はAB型で、趣味は休日のテレビゲームに読書。悩みといえば、夏目<sup>なつめ</sup>飛鳥<sup>あすか</sup>という名前が少し女っぽいと言われるくらいで。ちなみに好きな食べ物は焼肉に海鮮パスタ。

まあこのように、本当にごくごく一般的な普通の男子高校生なのである。

特筆すべき点としては、自慢じゃないが成績が全国でもトップクラスの「エリート」と呼ばれる学生であるという事くらいか。

物心ついた頃から、母親に徹底的な英才教育を受けさせられ、小・中・高と共に勉強尽くめの日々を送ってきた。

現在も有名な進学校に在籍しており、来年も変わらず偏差値最高レベルの大学に入学する予定だ。既に合格判定はAクラスが出てはいるが、念には念をと言うことで、こんな遅くまで圏内のエリートが集まる進学塾に通わされている。

「ふう、もう随分寒くなってきたな……」

塾の建物を出ると、突然吹いた凍てつく外気が身を襲った。

今日は十二月二十四日。クリスマスイヴ真つ盛りの日である。

街をざつと見渡しても、まあ見事にカップルや恋人達でいっぱいだ。こんな日にも塾に通う独り者の俺は、何だかそこら中に蔓延したイチヤついた空気を鬱陶しく感じる。

俺は別に、特別異性からモテなかったりする訳ではないのだが、あまりそういうことにガツガツした……いわゆる「肉食系男子」ではないため、こういったことにはさっぱり疎いのだ。ただこの日だけは何故だか、町中にいるカップルを自然と憎悪の眼で見ってしまう。日本人特有の器の小ささというヤツだろうか。

「……………ふう」

何気なくついた小さな溜息は、真つ白い煙となつて空高くへ上つていった。

ま、いいか。何と平和な世の中じゃないか。

それから俺は家路についた。夜道を五分ほど歩いただけでも十二月の寒さは辛く、身体に密着させたこのコートとマフラーがなかったら凍死してしまうのではなからうかと思うほど寒かった。両側のポケットには携帯用のカイロを入れ、ポケットの中でそれを握り、手の中をじんわりと暖めている。これらは全て冬の受験生必須アイテムだ。

左腕の腕時計は午後十時四十七分を示している。

俺は家に帰った後の予定を頭の中で構想する。

家に帰ったらひとまず暖房の効いた部屋でソファに寝ころび、暖かいコーヒーでも飲んで、それからまた……夜遅くまで……受験勉強か。

「うーん……」

低い声で嘆息した。もう少し「夜遅くまで受験勉強」の間に何か挟めなかったものか。

何だかな。世の中が平和なのは大きいに良いことだけど、もう少し生活に変化があっても良いんじゃないだろうかと思う。俺が言っているのは別に、街に突然大怪物が現れたり、人智を逸した超人的超能力を授かったりとか、そういうのじゃない。それはそれで大変なことになりそうだしな。

ただ、俺ももう何年も全く同じような受験生活を繰り返しているのだ。

流石に疲れる。たまには友達同士で遊びにでも行きたいものだが、教育者の母親が黙っていないだろうからそれもできない。TVゲームは一日に三十分と定められているが、そんなんじゃモン。ンの上級クエストも満足にできないのが煮え切らない。……受験中に「遊びたい」と思うのは、この時期特有の受験生の本能的衝動なのだろうか？

「……はーあ」

頭ばかり回る脳が次第に疲れてきた。

遊ぶことを考えても空しいだけなので、俺は早歩きで家路につく足を速めた。

まあ考えるのは後にしよう。とりあえず暖房の効いた部屋に到達するまでは……。

その時だった。

帰宅後の勉強の予定を立てるため、何気なく左腕の腕時計を見ていた。

——突然、時計の秒針がピタツと止まり、動かなくなった。よく見ると、短針も長針も微動だにしなくなっている。

「……あれ、故障でもしたか？ 買ったばかりの筈なのに」  
左腕をぶんぶん振ってみたが、針は変わらず動く気配がない。

どうやら壊れてしまったらしい。仕方ないので腕時計は腕から外し、ポケットの中にしまい込んだ。……何だか変な感じた。新品なのに壊れるなんて。

直後、ふと街をゆく周りのカップルが目に入った。何とも仲むつまじげなお二人だ。

……しかしおかしい。その二人のカップル、手を繋いで笑ったままピクリとも動かない。片足は一步を踏み出そうとしているのに、いつまで経っても足を地面に付こうとしない。片足で立っている状態だ。

「？ ……なにやってんだ？」

俺は目を細めてその二人を見ていたが、やがてその俺の目はみるみるうちに大きくなる事になる。

街の異変に気付いたのだ。

「……え？」

これは一体どういう事だ。

街ゆく人々も、道路を走る車も、バイクも、自転車も、全て死んだかのようにその動きを止めていた。

夜風に吹かれて空を舞っていた新聞紙も空中でピタツと静止し、街灯の明かりに群がる小さな虫も微動だにせず固まっている。目に入る全てのものが、物理法則を完全に無視して動かなくなっている。

「何だこれ……どうなっちまったんだ？」

俺は訳が分からず、ただ辺りを見渡していた。

本当に全てが止まって、動いていない。

突如——視界がぐらつと歪んだ気がした。

次の瞬間、俺の頭の中を、強烈な激痛が走った。

「……？」

突然襲いかかったその痛みに耐えきれなかった俺は、思わず地面に倒れ込んだ。

「あつ……がつ……ああああああ？」

両手で頭を押さえ、コンクリートの道路の上を転がり回る。脳の芯が破裂するかのような激痛だ。

「頭が割れるっ…………？」

だがどんなにしても、その痛みが収まることはなかった。

…………一体どれほどの間、その痛みに身をよじっていたんだろう。五分か、十分か…………。それは分からないが、俺には永遠の時間のように感じられた。

だんだん目の前が白く霞んできた。

「…………だめだ」

色が消えていく。

「やめろ…………？」

何も映らなくなっていく。

「…………？」

意識が消えそうだ。

何だか眠い。

頭が割れる…………。

目の前が、真っ暗になった。

後から思うに、もし神が居るとするなら、そいつは俺の願いを聞き入れてくれたのかも知れない。

だが、もしそうだとするなら、その神とやらは随分と願いを叶えてくれるのが遅いじゃないか。

叶えられた俺の願いは、実に何年も前の、子供の頃のものだった。

T o B e C o n t i n u e d . . . .

## 第1話　？イヴの夜に響く？（後書き）

どうも初めまして。郷音ヒビキと申します。

初作品・初投稿となりますが、楽しんで読んでいただけたら幸いです。

まだ経験が浅いので文法や漢字のミスがあるかも知れませんが、お気づきになれましたら、お手数でなければご指摘お願いします。

物語の感想や質問なども、是非お聞かせ下さい。嬉しさのあまり狂喜乱舞すると思うので……。

受験勉強の合間に制作していきますが、どうぞこれからよろしく  
お願い致します。

## 第2話　？目覚めて、其処は？

―深く沈んだ闇の中

夢か現か分からぬ記憶

それらは「黒」を廻りつつ

やがて「白」へと近づいてゆく―

## 第2話　？目覚めて、其処は？

あれからどれくらい経ったのだろう。真っ黒だった視界が、少しずつ開けていく。

辺りがぼんやりと見えだしてきた。頭の奥底が痺れる感覚が、僅かに残る。

俺は……どうなったんだ？　おい、誰か答えろよ。誰か――

「……ハッ」

――目を覚ました。頭が、くらくらする。

「俺……一体どうなって……」

体中が、何か柔らかい物に包まれている感覚がする。この重力の感じ方は……。そう思い、俺はよろよろと上体を起こした。

俺はベッドに寝かされていた。見た限りえらく高級そうなベッドで、前と後ろの方には青色で縁取った装飾が付けられている。シートも毛布もふかふかで、肌触りも凄く良い。俺の家のベッドとは、比べものにならない程上質な物だ。

「……ここ、どこだ……？　俺は確か、塾から家へ帰る途中……急に頭が……」

朦朧とする頭でしばらく考えていたが、はっと気がつくと、俺はそのベッドから跳ぶように跳ね起きた。

訳が分からず、辺りをきよきよと見渡す。？その光景？を目にすると、思わず自分の記憶を疑ってしまった。

そこは「部屋」だった。とんでもなく豪華絢爛な、高級そうな部屋だ。

まず目に入ったのは、自分が寝ていたベッドのすぐ傍にある、豪華な装飾が施されたティーセット。下を見ると、規則正しく並んだ大理石の床に敷かれた艶のあるカーペットが敷かれている。

部屋の壁には、床から天井まで届くほどの巨大な本棚がいくつも並べられ、その中には見たこともないような分厚い本がぎっしりと詰まっていた。

近くの窓からは暖かい朝日が差し込み、ベッドを明暗で照らし出している。いつの間にか夜が明けていたようだ。

「……………」

俺はバカみたいにポカンと口を開け、それらを呆然と見渡す。

……俺は一体、どうなってしまったんだ。

何度も何度も同じ問いを自分に繰り返す。

「……夢でも見てるのか？」

現状では、それしか思い浮かばなかった。それほどに、その部屋の豪華さは常軌を逸していたのだ。

すると突然、前方から「コンコン」という、何かを叩く音が聞こえた。目をやると、そこにはこれまた豪華な両開きの扉があり、部屋の外側からその扉がノックされていた。

ノックをされているのだから「入ってます」と答えるべきだろうか？ いや、そんな訳ないか。一体、どういう対応を取ればいいのか……？

回らない頭でそうこう考えている内に。ギイツと小さな音が鳴り、両の扉はゆっくりと左右へ開かれた。俺は反射的にその向こうを凝視する。

「あら、気がついたみたいね。気分はどう？」

扉を開けて部屋に入ってきたのは、明らかに自分より年下で背の低い、一人の少女だった。少女は俺が寝ていたベッドの側まで来ると、近くにあったティーカップに、ポットから紅茶を注ぎだした。

「……えつと……あの……きみは……」

俺はというと全く状況が飲み込めず、恐る恐るその少女に尋ねる。

「……ああ、駄目よ、まだ寝てなくちゃ。熱はないみたいだけど、何だか凄くうなされていたし」

紅茶がティーカップに程よく注ぎ込まれると、少女は俺にそれを差し出した。

「ハーブティー。美味しいわよ」

「……え、あ、どうも……」

取っ手の方を受け取り、カップに口を付けて紅茶を飲む。……あ、これは美味しい。しつこすぎないほのかな甘みに少々の酸味が上手く解け合い、フランスの大地を彷彿とさせるふくよかな旨味が……って、何を言ってるんだ俺は。別に紅茶にうるさい訳でもないんだが。

俺はティーカップから口を離すと、深く深呼吸をし、意を決して少女に尋ねた。

「あの……ここはどこで、君は誰なんだ？　ここは君の家なのか？」

俺はこんな所に来て寝ていたつもりは無いんだが……」

すると少女は近くにあった小さな丸椅子に座り、こっちを向いて俺と向き合った。

「あ、自己紹介が遅れたわね。私はエリィ・ローホワイト。このアダム図書館の管理人で、近くに倒れてたあなたをここで介抱させ

て貰ったの」

その少女はとても綺麗な声で、至って真面目な風にそう言った。  
エリィ……ってこの女の子、外国人なのか？　つか、え、アダム  
図書館？　何それ？　そんな名前の図書館なんて近くにあったっけ？  
俺はまだ状況が理解できなかったが、とりあえずそのエリィとい  
う女の子に名乗っておくことにした。

「ああ……俺は夏目　飛鳥。どうぞよろしく……」

「うん、夏目君ね。私のことはエリィでいい」

「はア……そうですか……」

うーん。何だか微妙に会話がズレている気がする。その少女エリィは、自分のティーカップに紅茶を注ぐと、実に上品な仕草で紅茶を飲んだ。

よく見ると、エリィは実に可愛らしい少女だった。顔は人形のよ  
うに整った顔立ちで、薄い紫色の繊細な髪を、腰の辺りまでストレ  
ートに伸ばしている。瞳は吸い込まれそうな紫色で、その周りには  
少し大きめの銀縁眼鏡。服の袖はすこしだぶだぶで手首が出ていな  
い。身長は低く、多分百五十センチ台くらいしかないだろう。……  
総合して言うと、とても可愛い。

俺が少し見とれていると、エリィは少し下を向いたまま静かに口  
を開いた。

「……で、あなたは人間？」

「……は？」

？　？　？　一瞬、聞かれた意味が分からなかった。というか、  
何となく嫌な予感がする。さっきのアダムなんかという発言も然  
り、もしかしたらこの可愛い女の子は「電波」なのか？　という可  
能性が出てきた。だとしたら、参ったな。こういう風に対応すれば  
良いんだろう……？

「……まあ、な……。他に何がいるってんだ？」

俺は恐る恐る聞き返す。するとエリィは「やはり」といった表情

を浮かべた。そこから先、エリイの小さな唇は機械のようにぺらぺらと動き始めた。

「やっぱり……。じゃあ、驚くかも知れないけど、しっかり聞いて。」

「お、おお」

ごくつとつばを飲み込む。彼女の次の言葉は??

「この世界は、あなたが元々居た世界とは違うところなの」

「……………はい？」

変わらず、エリイはぺらぺらと喋り出す。

「あなたが元々住んでいた世界と、今ここにいる世界は全く違う物だということ。前者は『現実世界』と呼ばれていて、主に人間達が暮らしている世界。あなたもその『現実世界』に住んでいて、?こつちの世界?にはそこから来たの」

「……………えつと……………」

「そして、今私たちが居るこつちの世界は『幻想世界』と呼ばれる、もう一つの世界。『現実世界』とは次元的に隔絶された空間に存在していて、本来この『現実世界』と『幻想世界』の間を物質が行き来することは不可能——」

「ちよつと待て」

思わず会話を強引に断ち切った。いや、最早今のは?会話?ですら無かったと思う。

「……………意味が分からない。お前、それ本気で言ってるのか? 笑い話ですら……………」

「信じられないというのも分かるけど……………でも、今はこんな説明しか……………」

エリイの目が、少し俯く。

だが俺は少し強めの口調で、嘆息しながら立ち上がった。

「悪いけど、そんな電波話につきあってる程暇じゃない。よく分か

らないけど、介抱してくれたのは礼を言うよ。でも、俺も早いところ家に帰らないと。」

「……でも……」

まだとぼける気なのか。

俺はこの理解しがたい状況に、追い打ちを掛けるような彼女の意味不明な物言いに混乱し、少し腹が立つてしまったのかも知れない。右手に握っていたティーカップを近くの小さなテーブルの上に置くと、俺はさつきエリイが入ってきた扉の方へと向かい、つかつかと歩いていった。

そうさ、俺だって暇じゃない――。

そう思い、扉に手を掛けた瞬間だった。

ドゴオオオオオン？

突然、轟音が鳴り響き、地震のような地響きを感じた。その音はかなり近くで発生したらしく、部屋の中は缶に入れられバットで叩かれたかのような衝撃を受けた。

「なっ、何だ地震か？ ……うわわわっ！」

「きゃああああっ！」

俺は思わず、目の前にあった扉の取っ手にしがみつき、揺れに抵抗する。

後ろでエリイの甲高い悲鳴が聞こえた。

咄嗟に考える。いくら意味不明な奴とはいえ、こういう時に女を守るのは男の使命だ、と。

すぐさま彼女の近くまで行こうと、急いで振り返ろうとした瞬間だった。

思わず目に入った部屋の窓。その向こう側に、俺は見た。

体長はおよそ横に三十メートル。身体の色はドス黒くゼリーのよ  
うな形状をして、いくつもの眼球と手足を持った、そう……これを怪物と呼ばずして何と呼ぶといった、まさしく怪物が……俺の目に

入った。

「ギヤアアアアアア？」

その怪物は鼓膜が破れんばかりの奇声を発し、咆哮をあげる。思わず腰が抜ける。

声が出ない。

なんだあれは。

およそこの世の生物ではないであろうその異形のバケモノを、俺は床にぺたんと座り込んだまま、ただ驚愕するしかできなかった。

すると、その怪物の眼球の一つが、こっちを見た。

途端、あいつの体中の全ての眼球が、一斉にこちらをギョロツと睨み付ける。

俺は反射的に、窓の死角に座り込む。

どうしよう。体中の震えが止まらない。

あんな気味悪い生物を見たのは、勿論俺は生まれて初めてだぞ！

そして次の瞬間、一番聞きたくなかった音がした。

その怪物が歩き、地が揺れる音。そしてその音が、段々こっちへ近づいてくる音。

瞬間、悟る。

嗚呼……俺は死ぬのか。あのバケモノに喰い殺されるか何かして俺の頭には、最早自分の命以外の事項など頭の中にはなかった。

「大丈夫。私が止める」

ふと、後ろの方で小さな声がした。振り返る。

そこに居たのは、精悍な表情で窓の外の怪物を視野に入れて立つ、紛れもないあの少女、エリィだった。

おい……こいつ、大丈夫なのか？

俺はただただ、彼女を凝視するしかなかった。

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.....

## 第2話 ？目覚めて、其処は？（後書き）

どうも、郷音ヒビキです。

2話目です。楽しんで読んでいただけたら良かったです。  
未熟者ですが、3話以降もよろしく願います。

一応、次回からバトル展開ですので……。

### 第3話   ？異形の怪物？

瞬間、俺は押し黙る。

怪物はのっしのっしと地響きを立てながら、少しずつこっちへ近づいてくる。

後ろに佇むエリイはしっかりと窓の向こうの怪物を見つめ、立ち上がった。

おい……これは一体、何の冗談だ。

### 第3話   ？異形の怪物？

「止めろお前、何する気だ！ 速く逃げないと、きっと俺達あいつに殺される……！」

俺は力の限り叫び、怪物から逃げるように言った。

だが、エリイは俺の言葉に聞く耳を持たない。

「大丈夫、あなたこそ下がっていて」

何が？大丈夫？……！！

そう言おうとした直後、エリイはだぶだぶの袖から小さな右手を前に出した。

手の平を広げ、窓の向こうの怪物に向ける。

次の瞬間、俺は信じられないものを目にした。広げた彼女の右手の平に、青白い光が点っていく。

そしてエリイは力強く、口を動かした。

「コール エライソス スワイルナ ベルガノン  
詠唱。限定・解除・連結……」

聞いたことのない言葉を唱える度、右手の光は強くなっていく。そして彼女の最後の言葉で、手の平に集まっていた青白い光は一気に四散した。

「リジェクト・サンクチュアリ  
……発動！！？ 拒絶の聖域？！！！」

四散した光は部屋の壁を通り抜け、窓の外まで広がっていった。それぞれの青い光は小さなボタンくらいの大きさの球状になり、それぞれが紐のように綺麗に並んだかと思うと、球状から出る光と光でお互いを繋ぎ合い、どんどん連結していく。

「な……」

次の瞬間、窓の外の怪物が、それを見て急に焦るかのようにこっちに飛び込んできた。

「ガアアアアアアアア！！」

何十本もの足を高速で動かし、跳ぶようにして突っ込んでくる。

「無駄よ、もう遅い……」

後ろでエリイの呟き声が聞こえた。

途端、窓の外で繋がった光の紐は地面に着地し、それぞれが着いた箇所から真上に、青白い光の柱をもの凄いスピードで伸ばし始めた。走ってきていた怪物は急には止まれず、その光の柱に思いつきり衝突した。しかし怪物の身体は内側には通らず、その場で倒れ込むように止まってしまった。

「ガアアッ……」

怪物は低いうめき声を上げ、一歩後ずさる。

「……もう大丈夫よ。リジェクト・サンクチュアリ？ 拒絶の聖域？ は、私が指定した物体以外を拒絶する結果。そんなに長くは持たないけど、ギルがくるまでの足止めくらいなら十分だわ」

エリイはこちらを向き、俺に笑いかけた。りじえくと……何だつて？ 聖域？ 全く意味が分からないが、とにかく助けてくれたみ

たいだ……。よく見ると彼女の右の手の平には、まだ微かに青白い光が点っている。

「あ……えっと……ありが……とう……？」

何に対して礼を言ったのかは分からないが……とりあえずそう言っておくことにした。

「うん。さて……ここからはギルを呼ばなくちゃ」

ギル……誰のことだ？

そう思うや否や、ボタン！ と、扉か何かが力強く開く音がした。  
「……もう来てくれてたのね。呼びに行く必要は無かったみたい」  
俺は立ち上がり、外が見える大きな窓の縁にしがみついた。その向こうを凝視するように覗き込む。

男が一人走っていた。かなり背の高い男で、短く逆立った金髪。口には火の付いたタバコをくわえ、あの異形の怪物に向かってすごい速さで駆けていく。

「……こんな真っ昼間から来やがって……！ エリイが怪我でもしたら、どーしてくれんだコラア！！」

もの凄い形相のその男に呼応するように、怪物も一斉に目線と手足を男へ向ける。

「お、おい……あの誰なんだ？ 危なくないのか？」

現場から目を離さないまま、恐る恐るエリイに尋ねる。だが、エリイはもう既に安心した感じだ。

「ええ、あの人はギルって言って、私の幼馴染みの。私と違って？ バッジ？ を持った人だから、あの天界獣にも対抗できる」

はいストップ。また分からない単語がでてきたぞ。えー、バッジというのはあの服に付けたりする缶バッジ的な奴か？ そんな物の所有者だからと言ってどうなるんだ？ あと……多分？ 天界獣？ っていうのは話の流れからしてあの怪物のことだろう。そうか、あのバケモノは天界獣っていうんだな。

……名前なんて分かったところでどうにもならないけど……。

俺が回らない頭を無理矢理回そうと試行錯誤していると、突然、窓の外からとんでもなく大きな爆撃音が聞こえた。まるで大砲でも発射したかのような激しい音だ。

我に返って窓の外を覗くと、辺りには黒煙が立ちこめていた。その中には「怪物」改め「天界獣」と、あのギルとか言う背の高い男がうつすらと見えた。

「……ギヤアアアアッ！！！」

途端、途轍もない金切り声がこだまする。見ると、黒煙の中で天界獣が身をよじれさせながら、苦しそうに呻いていた。

「へへ、バーカ。お前くらいいの？狂獣種？が、俺に敵うわけねエだろうが……おいエリイ、もう結界解いてもいいぜ。こいつは死んだ」

男の勝ち誇ったような笑い声が聞こえる。こつちを向き、部屋の中まで聞こえるほどの大声で、男……ギルは両手を拡声器のようにして言った。

「……これって……助かった……のか」

俺は何が何だか分からなかったが、ようやく、ホッと胸をなで下ろす。どうやら死なずに済んだようだ。

……しかしあの男も物騒だな。大砲かどうか分からん武器で、あ  
の天界獣を倒したみたいだし。

しかし、エリイはどこか腑に落ちないような表情をしていた。その理由は、俺にもすぐ分かることになる。

「……ギル、後ろ！ まだ生きてるわ！！」

エリイが叫んだ。途端、まだうつすらと残る黒煙の中から、息を荒げる天界獣がよよると立ち上がった。

俺はその光景に再度泡を吹き、ギルは驚いた表情で後ろのそれを振り返る。

「うおっ、まだ生きてやがったのか。しぶてエな……ダメ押しが必

要か？」

ギルは面倒くさそうに身体を天界獣に向けると、右腕を天にかざし、握り拳を作った。

「いくぜ……？ 巨人大砲？！！！」  
ゴレムス・キャノン

ギルはそう叫んだ。瞬間、俺は自分の目を疑う。

上にかざしたギルの腕が、ガシャンガシャンといった感じの機械音を立て、腕の根本から捻れだした。

「な……なんだ、あれ！」

俺が口をポカンと開けている間に、ギルの右腕は一瞬で巨大な大砲に変形した。いや、造り替えられたといった方がニュアンス的には正しいか。

その大砲は元の腕の三倍近くはある巨大さで、銃口は一メートル近く幅があるだろう。あんな兵器、俺はテレビですら見たことがない。

「くらないア！！」

ギルが右腕を眼前の天界獣に向け、そう叫ぶ。

それと同時に銃口が火花を散らし、巨大な砲弾がもの凄い勢いで発射された。正直言って弾速が早すぎたため、色は黒っぽいと言うことくらいしか確認できなかった。

その砲弾は真っ直ぐに天界獣へ直進し、直撃した。

もの凄い爆発音と同時に黒煙が再び立ちこめ、爆発音に混じった微かな悲鳴が響く。

「ギヤアア……アッ……！！」

砲撃を喰らった天界獣は無惨に倒れ込み、赤黒い血を吹き、やがてピクリとも動かなくなった。

「いやー、はっはっは。割としぶとい奴だったなア」

彼はけけらと笑いながら帰ってきた。窓のすぐ傍まで来ると、その様子を見て、エリィはひどく嘆息した。

「もう。完全に停止するまで気は抜かないようにって、いつも言ってるでしょ。念のために結界を継続しておいてよかったわよ」

「まアまア、そう言うなって。お前が無事で何よりだ」

エリイとギルはそれぞれ普通に会話を続けている。

俺はと言うと、未だ冷めない夢の中にいるような感じだった。突然の危機が去り、少し冷静さを取り戻してから再び感じる。

「なんだよ、これは」

口に出して言った。エリイが首をこちらへ向ける。

「何なんだ！ 見たこともないバケモノに襲われたり、手から青白い光が出て柱になったり、人の腕が大砲になったり……。夢じゃないなら何なんだ！ 一切合切理解できねえ！」

思わず声が荒くなった。息を切らし、膝に両手を置く。

「……あれ、そいつは？」

ギルがこっちに気付いたらしく、窓の向こうから部屋を覗き込む。

「そいつは？」だと？ そりゃあこっちの台詞……。

「ああ、新しい？ 資格者？ よ」

……は？

エリイは至って真面目にそうギルに答えた。

……待つてくれよ。なんだそれは。

頼む、誰か説明してくれよ。とりあえずはその言葉の意味を。そしてあわよくば、「何故俺がこんな所にいるのか」も……。

To Be Continued……

### 第3話 ？異形の怪物？（後書き）

どうも、郷音ヒビキです。

相変わらず説明遅くなってますみません。

一応次の第4話で説明するつもりです。

ちなみに、エリィのあの呪文のコールは、実在する地名をもじった  
りして使ってます。

## 第4話 ？『幻想世界』？

俺の日常的だった生活は何故、こんな事になってしまったんだ？

いくら考えても分からない。

何故ならこうなった？原因？について、俺にはこれっぽっちも関与していないし知らないからだ。

にもかかわらず、俺はここにいる。

「見知らぬ世界」。

冗談ではすまされない。笑い事でもすまされない。

何しろ俺は、知らない間に謎の怪物達から、命を狙われるハメになつていたというのだ――。

俺はベッドに腰を掛けていた。

初めに俺が目覚めた部屋はエリイの物だったらしいので、それとは別に、二階に部屋を用意して貰った。腰掛けているのはその部屋のベッドだ。

俺は……まるで気を失っているかのように、ただ呆然と天井を見つめている。

話は一時間前にさかのぼる――

## 第4話 ？『幻想世界』？

「……で、どういう事なんだか、ちゃんと説明してくれ」

俺は椅子に座り直して口を開いた。エリイも同じように近くの丸椅子に座る。

ギルとやらの男はさつき図書館の部屋に上がり込み、部屋の壁にもたれかかっている。エリイが作り出した青白い光の柱は、いつの間にか消えていた。

「……そうね。ごめんなさい。少しばたばたしてて。ろくな説明もできなかったわ」

「まア、さっきのあれだつて初めて見たんじゃないの？ 無理はねエよ。天界獣って？ 狂獣種？ はキモいのが多いもんなア」

「……………それは後でいい。まず、ここはどこで、俺は何故こんな所に居るんだ。突然頭が痛くなったと思ったら、いつの間にかここでベッドに寝てたつてただけなんだぞ」

俺は訊きたくてしようがなかった質問を、やっと尋ねる。

「ええ。さつきも言った通りここはあなたの居た『現実世界』とは別にある、もう一つの世界でね、『幻想世界』と言う所。つまりあなたは全く別の次元空間へ来てしまったと言うことなの」

俺は深く首を傾げ、唸る。

しかし実際、目を覚ましてから俺は普通じゃないことばかり体験している。だとしたら、ここは――。

「……信じ難くはあるが、さっきのバケモノといい、腕が大砲になる人間といい、今は他に有力な確証がない……。まあ、？ 今のところは？ 百歩譲って信じておく」

「またダイレクトだなー。『腕が大砲になる人間』って、俺のことか？」

「だから今はいい。……じゃあ何で俺が、その『現実世界』から『幻想世界』へ来ちまったんだ？ そんな超自然的なことが俺一人に起こるなんて、どう考えてもおかしいだろ」

するとエリイは、当然の如くこう言った。

「何故かは、私にも分からないわ」

ええ？「分からない」とはこれまたアバウトな……。

「……何で？」

「『現実世界』から『幻想世界』へ人間が移動してくることは、本来極めて希なケースなの。しかもそれには原因はなく、ある日ある時突然起こるものとされているわ。この事については未だに詳しいことが分かっていないの」

「はあ……じゃあ俺はその神隠しとやらに逢って、こんな異世界じみたところまできちまったて訳なのか？」

「……まあ、そうなるわ」

成る程ね。本当に眉唾物の話ではあるが、まあ一応言われたことは信じてみる事にした。

いちいち言われること全てを疑ってたんじゃ話が進まない。それにこの二人も、俺に嘘をついて得な事なんて無いだろうに。こんな状況じゃ、信じることも大事なのかもな。少し意味は違うかも知れんが……。

「じゃあ……それはそれでもう良いとして、さっき出てきたあの変な？天界獣？とかいう怪物は何だったんだ？俺は本当に死ぬかと思っただけやしたんだぞ」

すると、エリイがどこか伏し目がちに口を開いた。

「あれは……ギルを狙ってるの」

「……え？」

「ああ、俺はあいつに、命を狙われてんだ」

「……マジで？」

「おお。マジで」

えらく軽く仰ってくれるな、この男は。今俺達って軽く凄い会話してるぞ。

「何でそんな事になってるんだ？何か犯罪を犯したとか、巨大な組織から逃げ出してきたとかしたのか……？」

「ハハハ、バーカ。そんな事じゃねえよ。正直俺だつて、あいつらにやあほとほと迷惑してんだ」

ギルは苦笑する。すると直後、ギルはおもむろに右腕を突き出した。

「ああ。原因は？これ？だ」

途端、ギルの腕が機械的な音を立てながら、さっき窓の外で見た大砲に凄い速さで変形していく。

「わっわっ！ 何やってんだお前！！」

俺が驚いている間に、右腕は完全に武器化した。物騒なその姿に俺は思わず後ろに腰を引いてしまう。

……しかし気のせいかな。前に天界獣と戦っていたときには、もつとずつと腕の大砲は大きかったはずだ。まるでこの男が自ら大きさを調整したような……。

「ダイジョブ、撃つつもりはねえよ。」

ギルはそう言って笑うと、直ぐさま大砲と化した右腕に、もう片方の左手で触れた。途端右腕は再び捻れ初め、瞬く間に元の腕の姿に戻った。

俺はただ呻くしかない。

「とどのつまり、俺は？資格者？って呼ばれる特殊な人間なんだ。その資格者は一人に一つ、それぞれ固有の「超人的な能力」を持つてる。で、俺の場合はこの《「武器」を司る能力》ってのを持つてな。自分の身体の各部を色んな武器に変形させられるんだ。……へへー、カッコいいだろ」

ギルは自分の右腕を自慢するように高く上げた。

……いや、別にうらやましくはねえよ。俺は深く嘆息する。

……今更ながら俺は思う。この現代の物理ではとうてい理解できないような現象が、今俺の目の前で起こっている。それは漠然ながらも、俺が『幻想世界』とやらに来てしまった理由として、ますます十分な物となっていた。

「じゃあ、お前はそれの？資格者？って呼ばれる人間って訳か……。  
まあそれは置いておくとしても、それなら何でお前から資格者は命を  
狙われてるんだ？」

するとギルは、溜息混じりにこう答えた。

「……わかんね」

予想外の言葉が帰ってきた。

「はあ！？……理由も分からずに命狙われてるってのか！？」

「そーなんだよ。それがさあ、俺も分かんないで四苦八苦してんの。  
あいつらは基本的に？資格者？を狙ってくるから、俺を目的として  
るってのは分かるんだけど」

「……ギルの言ってることは本当よ。 私にもいまいち襲撃をされ  
る理由が分からないの」

……呆れてものも言えん。それで命を狙われていいのか？ 再び  
深く溜息をつく。

「——ん？ でも待てよ」

ふと、頭の中を過去の言葉が過ぎってくる。

「そう言えば俺さつき……エリィから「新しい？資格者？」とかっ  
て言われてなかったっけ？ あれってどういう事なんだ？」

素朴な疑問だった。

まあ多分、間違いか何かだろう。それについては俺なりに確証が  
ある。

何故なら俺はギルのように腕が大砲になったりしないし、他に特  
殊な超能力を持ってたりしてるわけでもないんだからな。

「ああ、それは本当だぜ。 お前は新しい？資格者？だ」  
……え。

「あ、そう言えば、まだ詳しく言ってなかったわね」

……え？

「さつき『現実世界』と『幻想世界』の事について話したでしょ？  
この二つの世界はそれぞれが異なる次元帯に存在しているの。だからその間を物質が行き来することは物理的に有り得ないんだけど……その間の移動が唯一可能な物。それが？資格者？なの」

……？資格者？？ え？ はい？……俺が？？

「私が最初あなたに会った時、私は「あなたは人間？」と尋ねたでしょ？ あれはあなたが『現実世界』から来た人間かどうかを確かめるため。何も知らない人なら、そんなことを訊かれたら不自然な反応をするに決まっているから……」

彼女の言葉は直線的に耳に入っていた。それらは頭の中で計算され、ある結果を弾き出す。

「俺がギルと同じ？資格者？で、だからこの『幻想世界』に来られた、と。……ってことは、俺はギルと同じで……これからあの天界獣ってバケモノに命を狙われるって事か……！？」

「そうなるな」

ギルの一言は無情だった。

どうやら俺は訳も分からず、知らず知らずのうちに謎の怪物達に命を狙われることになっていたらしい。

……何という超展開！！ こんなのアリか！？ 訳が分からん！！

俺は誰かに向かって、声の限り叫びを上げた……。

To Be Continued……

第4話 ？『幻想世界』？（後書き）

どうも、第4話です。

本編中にもあったように、超展開のまま終わってしまいました。すみません。

第5話は真面目なのを書きます。

## 第5話      ?理由?

??ただ呻くしかない。

いつの間にか俺は部屋へ戻り、ベッドに腰掛けていた。

生ける屍の如く天井を見つめる俺は、さながら何を考えているのか、自分でも分からなかった。

## 第5話      ?理由?

コンコン。音が鳴った。

俺はうつろな目でそっちを向く。ドアが鳴ったらしい。

「よう。元気がア?」

入ってきたのは、あの長身の男、ギルだった。

そいつは軽い表情をしながら部屋にズス力と入り込むと、俺が腰掛けているベッドのすぐ傍にあった椅子に腰を下ろした。

?元気がア??じゃねえだろうが……。

「……何の用だよ……」

「ん? いや、少し話しても思ってたな」

「……悪いが、ちょっと静かにしてくれ。??俺は……自分が訳も分からないうちに、命を狙われることになってただなんて事、今を持って全然信じられない。未だに何かのドッキリじゃないかって、疑ってたぞ」

「……だーから本当なんだって。どのみちこの『幻想世界』に来て

るって時点で、お前が？資格者？ってことは確定なんだし」

「……………」

深い、本当に深い溜息をつく。

だってよ、信じられるか？ 普通。

？お前は特別な人間だ？とかいきなり言われて、おまけに？だから天界獣ってバケモノに殺されなくちゃいけない？だとか、合って間もない奴に言われてさ。

極々普通の高校三年生であるこの俺が…… あーもう、頭が痛い。

……だが、それが本当だとすればえらいこっちゃだ。現に俺はギルがあのか？天界獣？と戦ってるところをこの目で見ている。

確かに今になって思えば、あの時天界獣は最初俺を狙ってるようでもあった。

その事実が頭の中に浮かぶと、ますます己の絶望的、かつ破滅的、かつ終局的な運命を自覚するようになる。

「あーそうだ。お前に言っておくことがあるんだったよ」

ギルが突然前に身を乗り出した。今度は何だ――

「俺ら、明日ここを出るんだ」

「――え？」

「ああ、お前とエリイと三人で」

「……どこに行くんだ？ 買物物なんかに行くのか？」

「バーカ……そんな気楽なもんじゃねエよ」

ギルが少し伏し目がちになる。

「俺にもよく分らんが、今回の時空の開き方はどこか普通じゃないらしい。いくらやつても昨日の夜から、『現実世界』に流れる時間が全然動いてないんだそうだ」

「時間が……？」

思い当たる節がある。バタバタしていたせいで忘れかけていた。

それも昨日の夜って言えば……！！

「俺、多分それ知ってる……急に頭が痛くなって、気を失っちゃった時だ……！」

「何？ ……じゃあ、？資格者？はお前が最後か……」

「え？ 最後？」

首を傾げる。俺の言葉に、ギルは当然のように言葉を連ねる。

「ああ、もうこれで、二つの世界を繋げる扉は完全に閉じられちゃった。だから、もうこの『幻想世界』から、『現実世界』へ帰ることはできない。って事だ」

え、えええ！！？

衝撃が俺の脳裏を駆け抜ける。帰れない？ 元の世界へ！？ どういうこつたそりゃあ！？

「そもそも二つの世界同士に流れる時間は共通してたんだ。だからその気になれば？ 資格者？ なら『現実世界』へ帰還することもできたんだが……原因不明で、片方の世界に流れる時間がストップしちゃった。だからそのまま移動すると時間矛盾が発生し、そいつの存在そのものが消えちまう可能性がある。少なくとも、こうなった以上もう安全に帰る方法なんぞありやしねエのさ。同じ理由で、あつちからこつちへ来る？ 資格者？ ももういないだろ」

頭の中を更なる絶望感が貫く。……そうか、俺はもう元の世界には戻れないんだ。一生この世界で、あのバケモノ達に殺されるのを待つしかないんだ……。

最早諦めに近い形で、俺はがっくりと肩を落とす。だがそれに反するよう、ギルは厚い胸の前で握り拳をつくった。

「大丈夫だ。そのために、明日あいつらの元締めをぶっ潰しに行く

んだから」

「元締め……？」

「ああ、あいつらの出所は『アルカディア社』って会社からなんよ？資格者？をねらってるのはどうもそいつらしくて、天界獣を刺客として送ってくんのもそいつらだ」

「……会社、ときたか。何か急に日常的な響きに……」

「とんでもねエ。あいつらはただの闇企業さ。裏の世界に堂々と籍を置いて、虎視眈々と俺達を狙ってる。だからそいつらを潰しちまえば、おかしくなった次元空間も元に戻せるかもしれないし、少なくとも天界獣から襲われることは無くなる。だからその危険を排除しようって事で、明日ここを出るんだ」

「……そうか……なら、お前らがその会社を完全に取り壊してしまえば……！」

「あ？ 何言ってるんだ。お前も行くんだよ」

「……はい？」

一瞬、言われた意味が分からなかった。だが、ちょっと前にこいつが言っていた言葉を思い出す。

「言つたる？ 俺とお前とエリイとで、三人で行くって」

「な、何で俺まで行かなくちゃいけないんだ……！！？」

思わずベッドから飛び起きた。だが、ギルは至極当然のように話を始める。

「だーかーらー。お前も俺と同じ？資格者？だから、俺みたいに個別の「能力」を手に入れられるかも知れねエんだ。戦力になるんだつたら、連れて行った方が良いつてのが得策だろ？」

「ふ……ふざけんな！！ 何で俺がそんな危険なマネしなきゃあ……」

……！！

「どつちみち、あいつらを何とかして原因を確かめねエ限り、元の世界に戻ることはできないんだぞ？」

急に怒りがこみ上げてくる。

「けど……っ、そんなの絶対嫌だ！ あ的那天獣とかってバケモノとも戦って行かないやいけないってことだろ！？」

「まあ、そうなるなア。必然的に」

「……死ぬかも知れないんだろ！？」

「そりゃあ、もちろん」

息を切らしながら大声で続けた。だが、ギルは至って平然としている。

……なんでだよ。信じられるわけないだろ。俺は普通の高校三年だぞ？ いきなり漫画やゲームみたいに戦えなんて言われたって、そんなことできるか！ やられたってコンティニューできる訳じゃない。それで終わりなんだぞ！！

「俺は、行かねエぞ……」

再びベッドに腰を下ろし、静かに口を開く。

「行くならお前ら二人で行ってこいよ。俺はそんな危険なことになんて関わりたくない。……こんな若さで死の危険に晒されるなんてまっぴら御免だ」

「……そうか」

ギルはそう答えた。立ち上がると、部屋のドアに向かって歩き出した。

「まあ、嫌がる奴を無理矢理連れて行っただって、死人が増えるだけだし。「能力」を手に入れられるかどうかも怪しいもんだしな。まあ、俺が世界を元通りにできたら、そんな時は勝手に『現実世界』へ戻るといい。それでお互いにOKだろ」

「……何だよ」

ドアの取っ手に手を掛けていた彼に、その言葉を発する。ギルはその場で立ち止まった。

「何で、そんなに命賭けて戦うんだ？ 元締めを潰して危険を完全に排除するってのは確かに合理的だけど、別に来た奴を追っ払って

るだけでも良いだろ？ 相手の土俵まで行つて乗り込んでいくなんて、わざわざ死に行くようなものじゃないのか？」

「……………」

しばらく場の空気が膠着する。少し経った頃、ギルは静かに口を開いた。

「俺はさ、エリイのために戦つてんだ」

「エリイ……あの女の子？」

「ああ、あいつちよつと訳あつて、小さい頃から母さんが居なくてさ。他に頼れる奴も居なかったから、今は幼馴染みの俺が親代わりみたいになつてんだ。けど俺は天界獣から命を狙われてる身だろ？ だからあいつにも危険が及んじまうんだけど、あいつは離れたくないつて言うし。だからせめてその危険をなくしちまえば、俺達は二人でいつまでも、平和に暮らしてられるから」

ギルは胸ポケットからライターを取り出すと、くわえたタバコの先端に火を付けた。

「まあそれも十分危険じゃあるが、俺は絶対エリイを守つてみせる。願わくば戦力になりそうなお前にもついてきて欲しかったけど……嫌なら別にいい」

それだけ言うとギルはずつと握っていた取っ手を引き、外の廊下へと出て行つた。扉がパタンと閉まると、部屋の中は再び静寂に包まれた。

居るだけで騒がしい男だ。そう思った。

だが、あんな男にも優しい面はあつたんだな。

ま、確かにあの男とエリイに同情はしてやれるが……だから言つて俺までついていく必要は無い。ある訳ない。

行くなら勝手に行つてくれ。こんな急展開を……俺は認めない。

あわよくば世界の次元空間とやらを元に戻した後、俺は勝手に『現実世界』へ帰らせて貰うよ。

窓の外は、だんだん夕暮れ近くなっていた。  
俺は、布団に寝ころんだ。

T o B e C o n t i n u e d . . . .

第5話   ？理由？（後書き）

明けましておめでとう御座います、郷音トビキです。  
急展開で申し訳ありません。  
昨日年超す時は、寝てました。

## 第6話   ？襲撃？

次第に、夜になった。

日は沈み、辺りはずいぶんと暗くなった。

窓の外では草木が夜風に吹かれて揺れている。

夜空にはおぼろな満月が浮かび、その月光は地を明るく照らし出していた。

どうやら『幻想世界』も、環境的には『現実世界』とあまり変わらないらしい。

そんな中、俺の胸には去来するものがある。

もしかしたら？あいつ？も今、同じ満月をみているのかな、と――

## 第6話   ？襲撃？

「……………」

特に理由はなかった。俺は来たときに着ていたコートを再び羽織り、部屋のドアを開けた。

外に出よう。別に散歩だ。どこから逃げ出したりする訳じゃない。ただ昼間からあまりにも色々な事がありすぎて、俺は少し頭を冷やしたかったのかも知れない。

今更ながら、ここは本当に「図書館」なんだろうか、俺は未だに目を疑っているようであった。部屋は勿論、それを繋ぐ廊下も本当に豪華としか言いようがないなもので、漫画やテレビでしか見た

ことがない。さながら「ハ。テのごとく！」に出てくる三。院家のごとく！だった。……あ、今うまいこと言った、俺。

ただ本当に図書館ではあるようで、建物は全部で三階建てのうち、一階は居住スペース。二階と三階には全ての部屋にぎっしりと本が蔵書されていた。他人の家で失礼とは思ったが、今までざっと建物内を見て回っていたのだ。しかし、それでも恐らく全体の二割も回っていないだろう。それくらいバカッ広かったのだ。

ギイイイ

門を開け、外に出る。コートを羽織ってきていたからまだ良かったが、やはり外気は冷たかった。

「うっ……寒……」

バタバタしていたのであまり目には入っていなかったが、外はたっ広い草原だった。その中に、この「アダム図書館」が一人ポツンと置かれているのだ。

夜風に草が揺れ、周りには図書館を囲むように森林が生えていた。何と殺風景な場所であろう。まあしかし、こういう場所でも「屋敷」と、ある種風情があるものなのかも知れない。

「何か……まだ信じられないな。本当に？ 異世界？ に来ちまったなんて」

吐いた言葉は白い霧となって、上へ霧散していった。

「おい、あいつが見当たらねえんだけど？」

「え？ 部屋にいないの？」

エリイの部屋に、ギルが顔を出す。

「ああ、部屋の明かりが消えてんだよ。近くの部屋も探したんだけど、どこにも居なかったぜ」

「……散歩かしら？ さっき門が開いたような音がしたから」

「ハア？　ったく、あいつはまだ分かってねエのか。？資格者？　ならいつ襲われたって不思議じゃねエってのに」

「でも、大丈夫なんじゃない？　天界獣は今朝来たばかりだし、私が居るうちは、そんなに早くは来られないだろうし」

「……そうかな……　なにか今夜は、落ち着かねエ気がする……」

ギルは、どこか不満げな表情を浮かべていた。

「……？　あ……」

すると、エリイが急に不自然な動作で目の壁を凝視した。

「ギル……あれっ……！」

「……どうした？　ただの壁——……！！」

言いかけた直後、ギルは何かを思い出したように部屋を飛び出した。

十分ほど経って、図書館の近くを大体見渡した。どこもかしこも平野だった、ここが異世界の地なのだと思うと、何だか少し楽しくもあった。こんな事を考えるようになった自分に少々疑念を抱きながらも、俺は寒空の下、足を黙々と動かした。そろそろ寒さが堪えてきたので、図書館の暖かい部屋に戻ろうとした、その時だった。

森の奥で、木が倒れる音がした。

メキメキと唸った後、ズシンという音が地に響く。

「……何だ？　木って自然に倒れるものだったけ？」

まあ、そういう事もあるのかな？　程度に、その時は考えていた。

だが、それは確実に「異常」だった。

一本目が倒れた直後、何本も、何十本も、続けて一連の木が倒れる音が響いてくるのだ。

メキメキ、ズシン。

メキメキ、ズシン。

メキメキ、ズシン――。

その異様な音の連続に、俺は明らかに違和感を覚える。

「お、おいおい、なんだこの音――」

言いかけた直後、異変は目に映ることになる。

「あゝあ、やっと着いたわ。あの女も面倒な結界張ってくれるわねえ――」

森の奥から、一つの人影が見えた。

その人影は辺りの木を切り倒しながら、こちらに歩いてくる。

「えゝつと、今回の目標は？資格者？ギル・ガレイクと……」

一人でぶつぶつと言っていた？そいつ？は、森を抜けると月明かりに照らされて、その姿が鮮明に映し出された。

背の高い「男」のようだ。派手な格好をしていて、サーカスのピエロのようなメイクを顔中に塗りたくった、街中で見かけたら余裕で警察に通報されるくらいの「変人」であつた。眼は大きく、なにやら変てこな赤と白の縞模様の帽子を被っている。

というか、男が女の喋り方をしていると、多分に？あれ？だろう。

「な、なんだあの人……」

「……あら？ あなた……」

いきなり眼が合ってしまった。まいったなア、個人的にはあまり関わりたく……。

次の瞬間、そいつはいきなり大声で奇声を上げた。

「んまゝゝつ、これはラッキー――！！ 報告には無かったのに、？資格者？がもう一人ゝゝ！！ あれを仕留めたら、もしかしたらアタシ昇格とかしちゃうんじゃないのゝゝゝ――！！」

何やら顔を撫で回しながら狂喜している。……いや、本気で大丈夫かこの人……。

そう思った直後だった。

「じゃ、バイバイ」

そう言うとその男は、いきなりこつちへ向かって走り出した。両手両足を振り出しながら、何とも凄い形相で。

「ちょ、ちよつと、あなた誰ですか！？ とりあえず近寄らないで

……！  
「？切裂鎌？……！」  
きりさきがま

男がそう叫んだかと思うと、途端、無意識に背筋がぞつとした。そのせいで、背を向ける形で男から逃げ出した俺は、地面の土に靴のつま先を引っ掛け、ドタツと転んでしまった。

「い、いたた……」

地面に突っ伏した状態で、強く打ち付けた胸をさすり、立ち上がるようにする。

次の瞬間、俺は背中に酷い違和感を感じた。不思議に思って背中に手を回すと、手のひらがべたつと濡れる感覚と、刺すような鋭い痛みを瞬時に感じる。

「な、なんだこれ……！」

背中肉がすっぱり切れていた。幸い傷は浅かったので大した事は無かったが、分厚いコートの生地が端から端まで一本の太刀筋で切裂かれています。傷口からは暖かい血が流れ出し、その下の白いシヤツをどんどん真っ赤に染めていった。

「う、う、うわわわ……！」

「もう……。避けちゃだめでしょ！ 次で喉元を掻っ捌いてあげるから、それでさっさと死になさい……！」

男は眼前に立ち、俺のほうに手を伸ばしてくる。

死んだ。

事情はさっぱりわからないが、俺はこの男に殺される。本能が瞬時にそう判断した。

身体が震える。こんなに緊迫した状態だからか、背中痛みがあまり気にならなくなってきた。

「じゃ、死・ん・で」

男に、首をがちりと掴まれた。

嗚呼、さようなら。俺の短い人生……。

「オラアアアアー!!」

手が首から引つpegされた。目の前に居た男は後ろに吹っ飛ばされ、遙か遠くの巨木に礫にされるように激しく激突した。

「う、うぎゃあ……!!」

男は弱々しく倒れこむと、苦しそうに呻きながら腹を押さえ、辺りを転がりまわっている。男の近くには、黒光りする鉄のような砲弾が一発転がっていた。

「はあっ、はあっ、あ……危ねえ」

後ろから激しい息遣いが聞こえる。振り返ると、そこには見覚えのある男が肩で息をしながら立っていた。

「……コラテメエ! なに? 資格者? なのにこんな夜遅くに出歩いてやがんだ!! もう少して死ぬとこだったんだぞ!」

ギルだった。凄いい剣幕でこつちを睨みつけながら、灰色の大砲と化した右腕を男のほうに向けている。

右腕は以前見たものよりも銃身が小型で細長い。恐らく弾の種類が違うのだろう。俺の後ろから放たれた砲弾は男の腹に直撃し、そのまま遙か遠くまでふっ飛ばしてくれたのだ。

「……なんなのよ、アンタ……!!」

よろよろと立ち上がりながら、男はこちらに歩いてくる。ギルは拳を鳴らしながら腰を沈める。

俺はというと地面に尻餅をついたまま、ただただ呆然とその光景を眺め、いまさら戻ってきた背中の痛みを耐えることで必死だった。「お前、《アルカディア社》のモンだな？　とうとう帝クラスまで動き出しやがったか……」

「そういうあなたは、今回の目標の？　資格者？、ギル・ガレイクね……」

「いかにも」

ギルは薄い笑みを浮かべ、右腕を構えた。

T o B e C o n t i n u e d ……

## 第6話   ？襲撃？（後書き）

謎の男は自分で書いてて気味悪いです。  
……最近ちょっと風邪気味です。

## 第7話　？アルカディア社「帝」鎌鼬のシルファー？

「報告されてる以外に？資格者？が居たものだからラッキーだと思つてたけど、このワタシに一撃喰らわせるなんて、アナタ只者じゃないわねエ。こりゃ少し骨が折れるかも」

男は立ち上がると、そのピエロの衣装のような服装を正した。

「ワタシは《アルカディア社》の「帝」<sup>みかど</sup>、シルファー。とりあえずアンタ達を殺すのがワタシの任務……だから、大人しく死んで？」  
「……ヘッ、ところがお生憎。死ねと言われて「ハイそうですか」と死ぬほど、素直な性格してねエもんでな。……やるからにやあ、本気で行くぜ」

ギルはその鋭い双眼で、シルファーと名乗る男を睨み付けた。その目付きは、以前見た飄々とした感じは微塵も無かった。

第7話　？アルカディア社「帝」鎌鼬のシル  
ファー？

「……時にお前……怪我、大丈夫か？」

「え？ あつ、背中……痛っ！」

ギルは横目で背中中の切り傷を見た。途端思い出したようにじわじわと痛みが浸食してくる。

だんだん血の気が失せ、頭がくらくらしてきた。

今までに体験したことも、見たこともない様な出血量だったが、

それでもショックで気を失わずに済んだのは偏にこの危機感からだ。人間、死の恐怖に直面すると、傷や痛み、出血などどうでもよくなるらしい。それを証明するかのように、遠くに立つシルファアの姿を見ただけで再び背中の感覚が薄れていった。

「……殺してやるわ!!」

「……下がってろ。ゴレムス・キャノン？ 巨大大砲？ ……!!」

シルファアはこっちに向かって走り出し、ギルはそれを迎撃するように、最早見慣れたものではあるが、右腕を大砲へと変化させた。「喰らいやがれ!!」

そう叫ぶと同時に、右腕から爆音と共に大砲が撃ち出された。砲弾は直線的な軌道を描きながら、走ってくるシルファアを迎え撃つ。その距離はどんどん縮まり、一瞬で目と鼻の先になった。

「こんなもの……？ 切裂鎌？!!」きりさがま

鋭い閃光が走った。

途端、直撃するかに思われた砲弾は真つ二つになり、シルファアを避けるようにそれぞれが左右へ逸れた。遙か後ろで二つに分かれた砲弾の暴発が起こる。

シルファアは不敵な笑みを浮かべ、腕を撫でた。

「フフ……ワタシの持つ能力は《鎌》。自分の身体の如何なる部分も鎌に変形させ、触れるものみくんな切り刻んじゃう。アナタだって、この鎌でダイコンの輪切りみたいにしてあげるわ!」

見ると、シルファアの両腕には外側に鎌の刃のようなものがずらっと生えていた。白と黒が波のように入り乱れた乱刃で、成る程あれなら弾丸も斬れそうな勢いだ。

「でっ、でも……何であいつは……?」

俺は一瞬で思考を巡らせる。

あのおよそ人間とは思えない力。加えてあんな風にあいつが言っ

ている以上、きつとあのシルファアという男もギルと同じ？資格者？に違いない。

だが、それならば何故あいつはギルを殺しに来たみたいな言い方をしているんだ？

「……おい、お前！！」

「あら、何かしら？」

「お前……何でギルや俺を殺そうとするんだ！！」

「……は？」

「お前も？資格者？なんだろう！？それならきつと俺達と同じで、天界獣から命を狙われる存在な筈だ！その点ではお前もギルと同じ立場な筈なのに、何で？資格者？どうして争ったりするんだ！？」  
俺は声を張り上げる。血を流しすぎて少々貧血になっていた為に少し堪えた。

だが、男は「クククツ」と呟くと、やがて腹を押さえて笑い出した。

「……あーっはっはっはっ！ア、アナタ、本気でそう思ってるの！？ワタシをそんな馬の骨と一緒にしないで頂戴よ！」

俺は意味が分からず、啞然とする。

その横でギルはタバコをべつと吐き捨て、靴の裏で火を消した。その表情はどこか、込み上げてくる怒りを押さえているように見えた。

「確かにワタシは？資格者？よ。でもそいつと違うのは、《アルカディア社》に属する存在だって事。

《アルカディア社》は闇の世界に存在する、その存在も一部の人間しか知らない程の裏企業。そこでは？資格者？を狩るために上部から色々と手が回され、この世に存在する全ての資格者の《魂》を集めるのが最終目的。

だからワタシはアナタを殺し、その《魂》を奪う為に派遣されたって訳。ま、それ以外にも資格者が居たってのは、ホントに嬉しい誤算だけだね。……あ、因みに言っておくと、天界獣を刺客として

送り飛ばしてるのも我が社なのよ」

「うるせエな……訊いてもいねエ事をごちゃごちゃと」

シルファアがぺらぺらと語っているのに我慢ができなくなったように、ギルが握り拳をつくった。

「何にしても、「帝クラス」が動き出すとはちよつとした一大事だな。今までは天界獣しか来てなかったが……連中もそろそろ痺れを切らしたか？」

「さあね。何にしても任務の失敗なんて許されないの。アナタ達には二人とも死んで貰わなきゃ……」

「やれるもんならな。御託はいい加減聞き飽きた。とつと来やがれ！」

「（おいお前、走れるか？）」

思い切りよく怒号を飛ばしたギルは、俺の方を見ずに小声でそう言った。

「な、なんとか……」

「なら、早い所図書館へ逃げて、エリイの所に行け。あいつのすぐ傍なら結界が守ってくれてるから、あいつもそう簡単には入ってこれねエ」

「わ……わかった。でも、お前は……？」

「心配すんな。逆にお前にウロチヨロされたんじゃ、戦いづらくてしょうがねエ」

一人で逃げるのは少々忍びなかったが、確かにギルの言うとおりだ。結果がどうかはよく分からなかったが、今は逃げるしか……！  
「あら、そのコは逃げるつもり？　そうはさせないわよ……」

「……！　おい、危ねエ……！」

ギルの叫び声が聞こえた途端。  
左足に鋭い痛みが走った。

そのまま足に力が入らなくなり、訳も分からず、俺は妙に不自然な動きで地面に倒れ込んでしまった。

「……あれ？ 左足……」

痛い。

刺すような痛みが突如襲いかかる。

近くの地面に生え並ぶ芝生は、ペンキを零したかのように真っ赤に染まっていた。

左足が、斬れていた。

傷は深く、足は太ももの辺りを横に半分以上切り裂かれ、鋭利な切れ込みから血がドクドクと溢れ出している。

背中を切られたときのデジャビュの様な感覚を感じながら、俺は顔を歪ませて叫び声を上げた。

「うっ、うわああああ!!」

「お前っ……!!」

ギルが急いで駆け寄ってくる。

「大丈夫か!？」

「いつ、痛いっ……あああっ!!」

血が止まらない。次から次へと溢れ出す。

何故あれだけ距離が離れているのに、俺は足を切られたんだ。なご疑問に思う点はあった。

だが、今はそれすらも掻き消すほどの痛みと恐怖に俺は支配されていた。

「傷が深いな……とりあえず、これで止血しろ!」

ギルは躊躇いもなく自分のシャツの右袖を破ると、それを俺の左足の傷にきつく巻き付け、縛った。途端白い袖は真っ赤に滲んだが、なんとか出血は治まった。

俺は顔を真っ青にして倒れ込む。心臓が早鐘のように鳴り、口の中はからからに乾いていた。

ふと思う。あと少し左足が外側にずれていたら、俺の目の前には切断された左足が転がっていたのだろう、と。

想像しただけで、さっと血の気が引いた。そんなこと考えたくもない。

「あゝらら、また外れちゃった。二度と逃げられなくなるように、足を切り落とすつもりだったのに」

シルファアは残念がるそぶりをしながらも、恍惚な表情を浮かべていた。

ギルは立ち上がり、シルファアと向き合う。その表情はさっきよりももの凄いい怒りに包まれていた。

「この野郎……！」

「ふふ、そのコはもう満足に逃げられないでしょうから。次はアナタを切り刻むとしましょうか……？ おおきりさがま 大切裂鎌？！！」

途端、シルファアの両腕は付け根から巨大な鎌へと変わった。腕全体が根本から大きな鎌のようだ。

ギルもそれに応じるように、右腕を突き出す。

アイアンブレード  
「？鉄の大剣？……！！」

ギルの右腕は機械的な音を立てながら捻れだした。だがそれは大砲の砲身ではなく、肘から先が、分厚く巨大な大剣に変わった。先端が地面に付きそうなほど大きな剣だ。

「剣だつて？武器？だ。俺が大砲にしかならねエと思ったら大間違いだぜ。……返り討ちにしてやる！！」

「そんな事できないわよ？ だつてそれより先に、アナタはこの鎌で全身バラバラにされちゃうんだもん！」

シルファアは巨大な鎌と化した両腕で互いの鎌を研ぎ合いながら、不気味な笑みを浮かべる。

ギルは右腕の大剣を鋭く構えると、静かに息を吐き出した。

空に浮かぶ満月は、二人の姿と、赤く血に染まった芝生を照らし出していた。

T o B e C o n t i n u e d . . . .

## 第7話　？アルカディア社「帝」鎌鼬のシルファー？（後書き）

7話できました。

何か第6話から残酷描写多くなってしまった気がします。

表示を書き換えておかなければ……当初は残酷描写は入れない設定だったんだけどなあ……。

あと明日からパソコンの起動時間が親に制限されるので、掲載速度が遅くなってしまうかも知れません。ご了承下さい……。

## 第8話　？夜が終わる？

俺は左足の痛みには耐えながら、何とか立ち上がる。

なんとか、このまま歩いて逃げられない事もない。止血はしたものの、傷口からはまだ鮮血が漏れ出していた。

ギルとシルファアは互いに一瞬睨み合うつと、勢いよく駆けだした。ギルは大剣。シルファアは両腕の鎌を以て。

## 第8話　？夜が終わる？

「うおおおおああッ！！」

二人は至近距離で、激しい斬り合いを繰り広げる。

鎌と剣が交差する中、服の端や頬にはどんどん切り傷がついていく。

時代劇ですら見たことがないような凄いスピードの斬り合いで、お互い一度も致命傷を負わないのが不思議ですらあった。

「この……ッ！」

ギルは地面を蹴って一端後ろに跳ぶと、大剣となっている右腕はそのままに、もう一方の左腕を空高く掲げた。

ガトリング・バルカン

「？乱銃連弾？！！」

左腕は腕の根本から変形し、細い口径を幾つも持つバルカン銃へと変わった。

ダラララララッ！！

すかさず激しい発砲音を連続で響かせながら、怒濤の勢いで連射される銃弾。

しかしシルファーは自分に向かって跳んでくる銃弾の一つ一つを連続で切り刻み、ことごとく軌道を逸らす。

「……のやるオ！」

「フフフ、こんな物でワタシが倒せるとでも？」

するとギルは左手で銃弾を撃ち続けながら、横目で俺を見て言った。

「おい、お前！ まだ走って逃げられるか！？」

「え……多分、何とか……」

「ならさっさと行け！ これ以上俺の手を煩わせんじゃねエよ！」

「あ、ああ……分かった！」

俺はその言葉通りに震える足を無理矢理動かし、おぼつか覚束ない動きで動き出す。

「逃がさないわよ……？ ひえんがま飛燕鎌？！！」

「……」

シルファーが腕を一振りすると、腕から鎌の刃だけが外れ、まるでブーメランのように鎌が回転しながら凄いスピードで飛んできた。

……あれか！ 俺はあの飛ぶ鎌で足を切られたんだ！！

「くそ……ッ！！」

「！？」

ブシュッ！

鮮血が飛び散った。

ギルは、俺をかばって代わりに攻撃を喰らった。  
斬られた左肩からは血が噴き出し、バルカン銃と化していた左腕は元に戻ってしまった。

「ちっ……！」

「ギ、ギルッ……！」

「あゝら、またハズレか……。残念」

シルファアの硬骨な声が響く。

ギルは、顔を歪めながら??。

「くっそ……お前がさっさと逃げねエからだ……！」

がつくりと力を無くし、膝について倒れ込む。

だが、そんなギルにもシルファアは容赦なく、追撃の手を休めない。  
い。

「これで……切り刻んであげるわ！」

シルファアは胸の前で両腕を交差させた。

途端、奴の体中のあらゆる所から、鎌の刃が勢いよく生えてきた。  
両腕・胴体・両足・首・顔・背中……見渡す限り身体が刃に包まれている。

「?切裂螺旋……きりさきらせん……大回転玉?だいかいてんだま?……!!」

叫ぶと同時に地面を蹴り出し、奴の身体は目にもとまらぬ速さで横に回転し始めた。周囲の風を切り裂きながら凄いスピードで突進し??その軌道上には膝について倒れるギルが肩で息をしている。

「おい、嘘だろ……避けるっ……!!」

ドスンッ！！

肉を切り裂く音が聞こえた。

体当たりを喰らったギルは、鮮血を上げながら倒れ込んだ。

身体に食い込んだ無数の刃は回転によってさらにギルの身体を切り刻み、声にならない叫び声と共に大量の血を四散させた。

「……………！！」

ギルは白目をむいたまま、指一つ動かさず、血の海にばったりと倒れ込んだ。

俺はその光景にただ愕然とし、立ち直ったシルファ―は両腕の鎌に付いた血を舌で舐め取っている。

「ふう、これでまず一人……と」

不敵な笑みを浮かべ、当然のようにこちらに近づいてくる。

がくがくと震える足は全く動かず、俺は後ろに後ずさる事すらできない。

「……………！！」

「そんなに怖がらなくても大丈夫よ？ 苦しくないように、一瞬で喉元を切り裂いてあげるから……」

「くそっ……………こっ、殺される……………！！」

「ハイハイ、じゃ、死んでね」

右手の鎌が、俺の首をめがけて襲いかかる。

あたかもスローモーションのように感じられるそれは、死の直前の走馬燈のようであった。

くそっ……！

くそ……ッ！！

俺は……あいつにまた会うまで……！！

ガキン！！

「あら？」

「……え？」

閃光が走った。

黒光りする？それ？は妖しく輝き、空に浮かぶ月光を跳ね返す。  
鎌の刃を？刃？で押さえて。

……？それ？は俺の手に握られていた。

「かたな刀……？」

？それ？は、刀だった。黒と白が交わらない流麗な直刃の「日本刀」。

いつの間にか俺はその日本刀の柄つかを握り、襲いかかった鎌の刃を止めていたのだ。

「アナタ……どこからそんな刀……」

シルファーは一步後ずさり、目を丸くして俺の握っている刀を眺める。

俺はただ哑然としたまま、同じように肩穴を凝視する。

当然俺はこんな物を持っていた覚えはない。どこから出てきたんだ、こんな物……。

「まさか……それがアナタのバッジってわけ……？」

「バツジ……？」

シルファアは鎌を構え直す。俺はなんとか立ち上がり、右手に握った刀の先を無意識にシルファアへと向ける。とはいえ、腰は思いっきり引けていたが。

「何なんだ、これ……？」

妙に手に馴染むその柄は赤く塗られ、その上には銀色に煌めく十字型の鏝。時代劇で見えるようなやつと大して変わらなかったが、その刀が放つ雰囲気はどこか妖しいものがあつた。

「こんな時にバツジを手に入れるなんて……早いところ片付けないと……！！」

きりさきがま  
「切裂鎌?!?!」

「え!? ちょ、ちよつと待って……!」

次の瞬間、右手に握る刀が自分から振られた。

横に大きく半月を描き、肩の高さで勝手に止まった。俺の意志とは関係無しに、刀が自分から動いたかのように。

途端、刀を振った軌道の空間が青白く浮き出た。

「ギッ……ギャアアアッ!!」

「……え!?」

走り出していたシルファアは、突如腹を押さえて苦しがつた。そのまま地面を転がり回る。

「きっ……斬られたアアア!!」

「斬られた……？」

意味が分からない。俺は別に何もしていないのに……。

「……あつ、そくだ……ギル!」  
急いで倒れたギルの元に駆け寄つた。身体の全面は酷く切り刻まれていたが、背中に手を当てると、弱々しいがまだ呼吸をしているのが分かつた。

「ハッ……ハッ……ゲホッ」

「……まだ生きてる……でも、このまま血を流し続けたら……」

「……なんなのよ、アンタ……」

シルファアが立ち上がった。肩から腰に掛けて大きな傷跡が通っており、鮮血が漏れ出している。

何なんだって言われても……俺は本当になにも……

「それが……お前の……バツジか……っ」

「おっ、お前!!」

ギルも、応じるように立ち上がった。ふらふらと危なっかしい虚ろな目をしているが、何とか意識は保てているようだ。すると、ギルはこう力強く叫んだ。

「振れ! 刀を!! それだけでいい!!」

「え!? 振るだけって言ったって……」

「……させないわよ…… アアアアアア!!」

直後、シルファアが叫びながら走ってきた。

くそ……っ、さっぱり訳が分からないけど……もうヤケだ! 何

でもやってやる!!

「これで最後だ…… ? 巨人の大砲?!!」  
ゴレムス・キャノン

ギルは血まみれの身体で右手を突き出しながら、最後の力を振り絞るようにして大砲に変化させた。

俺は横に並ぶようにして、刀を構える。

「? 切れ螺旋! 大回転玉?!!」  
きりさきらせん  
だいかいてんだま

さっきの技だ! 体中から鎌の刃を生やし、回転しながら突っ込んでくる。

「死になさいイイイ!!」

「ハッ……死ぬかよっ……」

「くそっ、刀を……あいつを倒せるように! 何でもいいからその力を……!!」

「ダアアア!!」

「……オラアアア!!」

「うりゃああッ!!」

ギルは大砲を発射した。

俺は力の限り刀を振った。

すると、目の前に信じられない物が浮かび上がった。

刀を振った軌道の空間が膨らむようになり、大きな?怪鳥?の形状を作っていく。

「……な、なんだこれ……」

その怪鳥は二メートルほどの大きさで、全身が青白く光っている。するとその怪鳥は翼を広げ飛び立つように、シルファアへと向かっていく。

「う、嘘ッ……こんな力のエネルギーって……!!」

「……これで、終わりだな……ア」

「ギッ……ギアアアアアア!!」

激しい爆発と青白い閃光が入り乱れ、シルファアは沈んだ。

辺りには硝煙しかせず……まるで時が止まったかのように静かになった。

「……ハア、あー……マジで死にそう……」

ギルはどさつと倒れ込んだ。傷口からは血が止めどなく流れ出す。俺は本来その光景に焦るべきだったが、何が何だか分からず、ただその場にペタンと座り込んでしまった。

右手に握っていた日本刀は、いつの間にか消えていた。

空に浮かぶ満月はやがて地平線に沈みかけ、空の端からは明るい太陽の日差しが漏れ込んでいた。

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.....

## 第8話 ？夜が終わる？（後書き）

どうも、郷音です。

シルファール戦何とか終わらせました。文章力無いので、相当読みづらくなってるのが自分でも分かります。これから精進していきたいです……ハイ。

因みに、シルファールのモデルとなったのは「D・Gray-man」の2巻、マテールに出てきた最初のレベル2です。アニメ版見たときに閃きました。

## 第9話　？旅立ちの朝？

すっかり日は昇り、朝になった。

血に染まった昨日の夜は嘘のように彼方に消え、明るい寒空には小鳥が羽を広げている。

俺は、まだ昨日の出来事が信じられなかった。

背中を伸ばす。

左足を動かす。

何も痛くない。それどころか、あれだけすっぱり切られたのに傷跡さえ残っていない。

その？何ともない？が示す違和感は、確実に、昨日の出来事を俺の記憶の底に埋め込むものだった。

## 第9話　？旅立ちの朝？

結局あの後、ギルは出血多量かなにかで倒れてしまった。

俺も背中と左足からの出血が酷かったが、朦朧とする意識の中、何とか図書館までギルを担いでいったのは覚えている。

昨日の夜のそれから――

「どうしたの、あなた達!？」

エリイが思わず叫ぶ。俺は血まみれになりながらも、近くにあったベッドにギルを寝かせた。

「それがっ……さつき変な鎌を持った奴に襲われて……それで、こいつは俺をかばってこんな傷を追って……」

息が上がったまま、俺はおおよその事情を説明する。

するとエリイは涙目になりながら、酷く焦った様子でギルの傷を優しく触り、出血の様子を確認しているようだった。

「出血が酷い……すぐ治しないと死んじゃうわ……」

「え？ 治すって……」

すると次の瞬間、いつか見た時のようにエリイの右手の平が青白く光った。

エフィソス ティアティラオディキア  
「限定・包囲・解放……治癒の光!」

すると、エリイの手にと持った青い光が四散し、ギルの身体を包み込んだ。

途端その光は夥しく出血する傷の周りに集まり、おひただ光同士が手を取り合うように連結していく。

傷口が、みるみる塞がっていくのが分かった、

エリイは額の汗を袖で拭くと、今度は俺の方に向き直った。

「もう大丈夫……出血が致死量まで達していなければ、一日もあれば回復するはず」

俺は力の入らない左足で床に尻を付いたまま、呆然とその光景を眺める。

すると彼女は俺の足に手を当て、さつきと同じ呪文のような言葉を唱え始めた。

途端、青白い光が傷に入り込むようにして、だんだん血を止めていく。違和感は全く感じず、何だか気持ちが悪く感じだ。

同じようにして、背中を横断する傷にも光が回り込んでいった。  
エリイはもう、さっきの様子とは打って変わって、安堵の表情を  
浮かべていた。

「……なんか、痛みが引いてきた……」

二分ほど経って左足を見てみると、もう殆ど傷は塞がっていた。  
成る程。あの光は恐らく怪我の回復をしてくれるもののなのだろう。  
以前の俺であれば、この現代医学でも到底理解できない様な現象  
に、度肝を抜かれるかただ慌てふためくばかりだっただろう。

……いや、実際俺も最初はそうだったのだが。しかし、ついさつ  
きの戦いといい、この世界に来て目が覚めてから、色々と非常識な  
事がありすぎた。良くも悪くももう慣れてしまったのだろう。

程なくして、足と背中への傷は完治した。触っても居たくはないし、  
床に垂れた血もいつの間にか消えていた。

ギルはまだ目を覚まさない。どうやら俺よりも受けたダメージが  
大きいため、回復に時間がかかるらしい。

「……ありがとう」

素直に、彼女に、礼が言えた。

「……ううん」

エリイは、こっちを向かずにそう言った。

……で、次の日の朝。自室のベッドの上。今に至る。

朝日が差し込む。空では小鳥が楽しそうに舞い、雲は風に流され  
ている。

ギルも目を覚ましたらしい。下から騒がしい話し声が聞こえる。

今日、ここを出るんだと言っていたっけ。

「……………」

複雑な思いが交差する。

もし、あいつらが奴らの会社を潰してくれたら、俺は元の世界へ戻れるのだ。だったら俺はその結果に期待する。

昨日のシルファーは？資格者？を全て集めるのが《アルカディア社》の目的、みたいなことを言っていた。

そして、俺もその資格者の一人だ。

ある意味、鴨が葱を背負って行くようなものだ。？飛んで火に入る夏の虫？と言うのも正にこの事だろう。

だが、ここでじっとしてたって、いずれシルファーみたいな奴がまた来て、俺達を殺そうとするのが続く……。

「……なあ、俺、どうしたらいいのかな……」

考え始めると、頭がこんがらがって、何だか分からなくなってきた。

まるで意識だけ宇宙を彷徨ってるみたいだ。

俺は両手で頭を抱える。

普通に勉強して。

普通に生活して。

普通に進学して。

普通に就職して??。

そんな普通の人生を、過ごそうと思っていたのに。

いきなりこんな世界に来て。全然理解が追いつかなくて。

それで今度は？資格者？か。

——俺の？普通？の生活は何故、こんな風になってしまったんだ  
??。

「また、会えるかな……千鳥……」

頭は、上がらなかった。

—————

「よっしゃ！ 絶好の旅出日和じゃねエか！」

ギルが思いつきり背伸びをし、太陽を仰ぐ。その後にエリイも続いて門から出てきた。

「結局……来ないのかしら、飛鳥君」

エリイが指をくわえるように、図書館の方を振り返った。目線の先には二階、飛鳥の部屋。

「……別にいいだろ？ あいつはここに残るみたいだし」

「そう。それよりギル、あなた怪我はもういいの？」

「おう、バッチリ全快してるぜ！ ……それにしても俺、昨日倒れる前のことあんまり覚えてねエんだよな。あの後どうなったかもサッパリだし。……まア、結局は勝ってたみたいだし、いいか」

「……気楽なものね……そろそろ行く？」

「……ああ、行こう。あ、手エ繋ごうか？」

「いらないわよ、ばか……」

「んだよ、寂しいなア」

エリイは嘆息した。大量の荷物を詰め込んだリュックを二人分背負ったギルは、けらけらと笑った。

――――

「おい！ …… ちょっと待てって！！」

慌てて叫び声を上げた。向こうはそれに気付いたようで、揃ってこつちを振り返る。

「ったく、こんな早くに出て行くとは思わなかった…………… まだ朝の六時じゃねえか！」

掛けてあったコートを纏い、シーツを簡単に直すと、部屋の扉を開けて階段を駆け下りていく。

一階まで到達するとすぐさま廊下を駆け抜け、外に繋がる最後の門を勢いよくぶち開けた。

「俺もっ………… 俺も連れてけ！！」

息が上がり、肩で息をしていたが、何とか声にした。

外の風が身体に当たり、コートを揺らす。

目の前には目を丸くして俺を凝視する………… エリイとギル。

「あれ………… お前、来ないんじゃないのかよ？」

「………… 気が変わった」

「ええ！？」

姿勢を直し、乱れた服を直す。二人は未だにうろたえているようだった。

「………… 俺も、付き合うよ。正直まだ、何が何だかよくわからねえし。会社を潰すなんて言われてもいまいち釈然としないけど………… その、俺にも俺で理由はあるから」

「……………」

二人は不思議そうな表情をしていた。俺の気がいきなり変わったのが不自然だったのか、それとも他に何か気にかかることがあったのか、それは分からないが……。

次の瞬間、二人は笑って言うてくれた。

「ああ、行こう」

「まあ……あなたも？資格者？だからね」

「ってか、元々誘うつもりだったしなア」

ギルとエリイは終始、笑いあっていた。

悩んでいても仕方ない。

それが俺の出した結論だった。どうせここにずっと居たって、元の世界に帰れる訳じゃないし、それどころか天界獣に殺されるのを待つぐらいしかできないのだ。

だったら、という訳でもないが。

最善を尽くしてみよう。

俺なりに。

下手なRPGゲームよりタチが悪いじゃないか。主人公の旅に出る理由が、？成り行き？だなんて。

俺は心の中で、少し笑った。

T o B e C o n t i n u e d ……

## 第9話 ？旅立ちの朝？（後書き）

どうも郷音です。

主人公が旅に出る理由は前々から考えてあつたんですが、相変わらず作者の文章力が地底王国が位置する地層よりも低いので、どうも言葉に直すとえらく不自然……というか、ご都合主義になってしまったように感じます。

後でよりいい書き方を思いついたら、修正しておきたいです。

追記：それから、少し受験勉強に追われているので、暫く掲載ペー  
ース遅くなるかも知れません。

第10話 ? Deep Red Blood ?

世界に生まれて。

そりゃあその世は理不尽に退屈なところがある。

俺だって、その日常から抜け出したいと思った事ぐらいある。

ゲームの中に出てくるような魔法やストーリー、モンスター。

夢物語のものとは知っても、確かに俺は？それ？に期待していたのだ。

ずっと前にも思ってた。俺は？それ？を望んでいた。

「夢」であつても構わない。

例え「夢」でも見てみたい、と。

えー……、済まない。話が分かりずらくなってしまった。

端的に言おう。

というか、今思い浮かぶ言葉はこれしかない。

「夢なら覚めてくれ」。

第10話 ? Deep Red Blood

d ?

俺が確認したのは全部で三体。

その全てが昨日見たものより巨大で、明らかに禍々しい雰囲気を放っていた。

既に一体はギルの手によって倒されたが、残りの二体は地を響かせながら俺達を追ってきていた。

？天界獣？だ。

二体はそれぞれ見た目に違いがあった。一匹は昨日見た天界獣をそのまま一回り大きくしたような感じ。身体がどす黒く、目が体中に幾つもあり、何十本もの触手のようなものを動かして移動するものだ。

しかしもう片方は全然違う姿をしていた。身体はルビーのように赤い血の色で、「人」の形をしている。身体の高さも普通の人間より一回り大きいといった程度だ。腕も脚も二本ずつあり、直立歩行でこつちへ動いてくる。顔は仮面をかぶっているかのようで、目や鼻があるべき位置に起伏があるだけだ。もう一体のように気味が悪くはないものの、これはこれでかなり不気味だ。

……で、俺はと言うと……

「はあつ、はあつ……！！」

平坦な黄土色の土が続く野道を、息を切らしながら、迫り来るその二体から走って逃げていた。

脚から聞こえる悲鳴を無視し、死にものぐるいで地を駆ける。

心臓の鼓動ははち切れんばかりに動いていたが、ここで止まったら確実に殺されるという恐怖が、俺の脚を無理矢理に突き動かす。

ふと後ろを振り返ると、さっき見た時とあまり変わらない景色が目に見え込んできた。

片方の、獣型の天界獣はそのヘドロの塊のような身体を凄いスピードで動かし、土の地面を滑るように追いかけてくる。もう片方の人型の方は急いでいる様子はなく、骨張った図太い両足でゆっくり

と歩きながら、しかし確実に俺を追い詰めていた。

……何の因果でこんなことになったのか、未だに俺にはサッパリだ。

どうもこの『幻想世界』に来てからというもの、不測の事態が後を絶たない。まあそれ自体にはもう慣れた感が少しあるのだが……。今回ののは、少し冗談じゃない感じた。

前触れなんて無かった。ほんの十分ほど前、いきなり図太い咆哮と地震のような地響きが鳴り響いたかと思うと、突然周りから三体の天界獣が現れた。それだけだ。

話が断片的すぎて分からないと思うが、いま俺が確認できている事実は本当にそれだけだ。……っつーか、逆に俺が説明して欲しいくらいなんだよ、このあまりにも理不尽な状況を！

「ギャオオオアアアアアア！！！」

「……っつ……！！！」

後ろから響き渡る天界獣の叫び声に、俺は走る速度は緩めないまま思わず耳を塞いだ。

バカみたいにでかい咆哮だ。両手で耳を塞いでも、指の隙間から漏れ込んでくる音が耳の芯をつんざく。こんな奇声を何十分も聞かされたら、鼓膜が破れるか頭がおかしくなるかのどっちかだ。

滴り落ちる汗、悲鳴を上げる膝、壊れそうな耳、口から飛び出そうな心臓。

それらの苦痛を全て抱きかかえながら、俺はただ必死で走り続けた。

「くっそ、あの野郎……」

体中が痛い。ズキズキする。

それというのも全部あの「人型」のせいだ。

ギルは右腕から滴り落ちる鮮血を脇目に、さっき吹っ飛ばされた時に挫いた足を無理矢理に動かした。

まさかこんなところで「人型」の天界獣に出会すとは思わなかった。

……いや、狙ってやがったんだ。事前にエリイが教えてくれたから良かったものの、咄嗟にガードしなかったら俺は今頃間違いないくたばってた。

「あいつ」に一発ぶん殴られただけで、こんな所まで吹っ飛ばされちまった。一体の狂獣種は既に倒したが、あの人型は格が違う。もたもたしてたら二人の命も危ないだろう。

「エリイともはぐれちまったしな……何しろ早エとこみんなと合流した方が良さそうだ……」

ギルは浅く舌打ちをすると、辺りの生え散らかった草木をかき分け、木々の隙間から光が差す方へ走っていった。

「……っはっ、も、もう駄目だ……」

とうとう体力に限界が来た。すねの骨は痺れ出し、頭の中が真っ白になってきた。

酸欠でくらくらする頭をもたげようとするが、叶わずがくつと膝をついてしまう。

後ろから変わらず追ってくる獣型の天界獣が、遂に獲物が観念したと言わんばかりに嬉々としたうなり声を上げた。

「ギャアアアアアアア!!」

「くっ……」

駄目だ。

圧倒的な絶望感が頭の中を支配した。何とか脚を動かそうとする

ものの、命令に反して一向に立ち上がろうとしてくれない。怒りをぶつけるように必死に膝を叩くが、既に叩いた感触さえ感じなくなっていた。

目線の先には、凄いスピードでダイブしてくる天界獣。

その巨体に日の光さえも遮られ、暗闇に閉ざされる中……。

「ギャアアアアア！！」

「……………っつ！！」

視界が真っ赤に染まった。

おびただしい量の鮮血が飛び散り、辺りに悲愴な「悲鳴」が響き渡った。

「ゲ……………！！！」

天界獣の「悲鳴」が。

「ゲギャアアアアアアア！！！」

「え……………？」

後ろでは胴体を通つ二つに切断された天界獣が苦しそうにのたうち回っていた。下半身はすでにピクリとも動いておらず、上半身だけが必死にもがいている。その大きな切り口からは、真っ赤な血が止めどなく溢れ出していた。

俺は訳が分からず、ポカンと口を開けたまま座り込んでいる。

溢れ出していた汗が一気に引き、動かない脚が痺れていることも忘れて。

「今……………何が……………？」

「ゲギャ……………ギャ……………」

苦しむ天界獣の悲鳴は徐々に小さくなり、やがて聞こえなくなっ

た。

すると真っ二つになった身体はだんだん色素が薄くなっていった。ギルにやられた天界獣もそうだったが、どうやら天界獣は死ぬとその身体が消えてしまうらしい。

身体が透き通るようになって完全に消えてしまうと、俺の身体に付着していた大量の返り血も、綺麗に消えてしまった。

「……………」

何となく、右手に何かを握っていた気がした。

ドゴオオオオオン！！

すると突然、後ろでもの凄い爆音が聞こえた。

何事かと咄嗟に首を向けると、遠くでは硝煙がもくもくと上がっている。

何となく見慣れた感じの光景に、俺の脳裏にはある希望が浮かび上がった。

「もしかして……ギルか？」

俺はがくがくと震える脚を無理矢理に動かし、どうにか立ち上がると、よろよると移動を開始する。

そつえばあの人型の天界獣は、俺を追うとき一度も走ってこなかった。

距離からすると、今さっき爆発が起こった位置は丁度あの人型がいるであろう辺りだ。

最初に襲われたとき、あの人型はすぐ傍にいたギルを森の奥へ殴り飛ばした。

二体の天界獣は吹き飛ばしたギルの方へは行かず、？資格者？の

俺を追いつけてきた。

恐らくギルはもう殺したものだと思いこんでいたのだろう。俺が逃げていたのはそれからだ。

……直感で、分かっていた。

さっきの獣型よりも、「人型」の方がよりヤバいという事は。

---

「……ヘッ、えらく吹っ飛ばしてくれたじゃねエかよ、この野郎……！」

崖の上から、呆然とする野郎を眼前に構える。

右腕を？ゴレムズ・キャノン巨人の大砲？に造り替え、砲身を向けると、あっちも両の図太い拳を構え直してきた。

やる気って事だ。

「エリイにゃ手エ出してねーだろうな……相手になるぜ、？超人種？！……！」

To Be Continued……

## 第10話 ? Deep Red Blood? (後書き)

ども、郷音です。

長らく休載してすみませんでした。

試験も無事合格したので、これからはバリバリ書いていきたいと思っています。

近々ユーザーネームを「郷音 ヒビキ」から「Kyoune」へ変えようかと思っている今日この頃。

## 第11話　？暗雲立ち籠める暗闇の森？

脚の傷が痛む。

ぼたぼたと滴り落ちる血が、その下の地面に赤く染み込んでいく。だが、今のギルには少しも気にならなかった。

目の前で、戦闘態勢に入っている？奴？がいる。

気は、そっちに向いていた。

### 第11話　？暗雲立ち籠める暗闇の森？

「……らあっ！！」

右腕の大砲を奴に向かって構え直し、いち早く腕に力を入れる。

途端、一瞬の出来事。

地に向かって打ち込まれた砲弾……によって引き起こされた爆発は、アイアンブレード辺りを煙で囲うにはうってつけだった。

「？鉄の大剣？……」

もくもくと硝煙が立ちこめる中、ギルは今まで大砲だった右腕を今度は剣に変える。鋼色に鈍く光り、身の丈ほどの巨大な大剣だ。

次の瞬間、煙の中からうなり声を上げる「人型」が飛び込んできた。

すかさず横へパンチをかわし、右腕の大剣で斬りかかる。

「このっ……!!」

「キシャアアアアア!!」

「……!!」

瞬間、ぞっとしたギルは、思わず左腕も小型の剣に変えた。

そこから始まる接戦は、とても筆舌には尽くしがたいものだった。ギルの剣による攻撃はことごとく「人型」の図太い腕や脚で弾かれ、時には刃を歯で噛み付いて止められる。

一方「人型」から繰り出されるパンチやキックは、ギルは剣で交戦すると同時に、何とか全てをかわしていた。

……一見、対等にも見えるこの勝負だが、ギルは既にこの戦いが、自分にとって圧倒的に不利なものであることを感じ取っていた。

まず、ギルと「人型」とじゃ身体が違う。

寶石のように赤く、鉄パイプのように図太い奴の手足は凄い筋肉で、筋肉質なギルの身体も奴の前では霞んで見えるほどだった。

その腕から鋭く空気を切って放たれるパンチは、一発食らうだけでも致命傷だ。実際、さっきからかわし続けているこいつの拳は、流れた先の大樹や石などを例外なく粉々に破壊している。大剣を盾にしてガードすることも考えたが、それだと確実に大剣ごと吹っ飛ばされて終わり、ということが目に見えていた。

……だが、ギルの剣を二、三発食らったってこいつは死にはしないだろう。

「人型」の拳はギルの頬や服を掠りながらも、何とか一度も直撃を食らわないまま耐え凌いでいた。

「（くっそ!! このままじゃ、やられんのも時間の問題か……!）」

そう思ったギルは、突如、右腕を大砲に戻した。

素早い動作で砲身を奴に向けると、そのまま右腕に渾身の力を込める。

「？巨人の大砲？！！」

ドカアアアン！！

目の前で爆音が響き渡り、もの凄い爆風に辺りの木々が千切れんばかりに揺れる。

ギルは、確かな手応えを感じた。

「ギッ、シャアアッ！」

「人型」は直撃した砲弾に吹っ飛ばされ、遙か向こうで硝煙に包まれた。

腹を痛めたかのような、「人型」の唸り声が聞こえる。

当然のごとく、ダメージは殆ど無さそうだが。ともかく、一時的にでも奴と距離を取ることは成功した。

ギルは深く息を吐き、今までの張り詰めていた状況を忘れるように、頭を左右にぶんぶんと振った。

「接近戦は自殺行為だったか……見たところ奴の攻撃は体技だけだったからな。ある程度の距離を置いた方が戦いやすい……」

そう思っていた直後。

身体が、吹っ飛ばされた。

突如、目の前の景色が、凄い勢いで遠ざかっていく。

「……かッ……！！」

流れていく景色の中に、拳を突き出す「人型」が見えた。

「……っは、……っ、はっ……はっ……」

荒く、小さく息をする。

なにが起こったのか分からず、ギルは静かに首を擡もたげた。  
だが、じわじわと、しかし痛烈にやって来た腹の痛みに、顔を歪める。

「……………」

朦朧とする意識の中、頭を左右に動かして辺りを見る。  
森の奥まで吹き飛ばされたのだろう。さっきまでとは全く違う景色だった。

辺りは大木で囲まれ、その木々の僅かな隙間から、微かに日光が漏れ出しているだけだ。

さっきより、圧倒的に暗い場所。

だが、それ以上に、

痛い。

「……………肋骨、何本かあったな、こりゃ……………」

声にならないほど小さな言葉を繋げ、何とか言葉にした。

だんだん、状況が飲み込めてきた。

——迂闊。  
迂闊。

完全に油断していた。

舐めていたのだ、奴の身体能力を。

？一瞬で距離を詰め、殴り飛ばす？。それは奴にとっては造作もないことだったのかも知れない。

一度吹っ飛ばしたからといって、距離が取れると思っていた。その自分の浅はかな考えに、今さらながら少し腹が立つ。

「やっべえ……………身体、動かねえ……………」

悲痛な声を絞り出したが、声を出すことすら苦痛を伴った。

ぐらぐらと揺れる視界の中、だんだん意識が遠のいていくのが分かった。

エリイは……そうだ、あいつは無事なのか？

あと……えー、飛鳥だっけか？ あいつともはぐれて……

……くっそ……

……あいつら……無事なんだろうな……

身体が、沈んでいくのを感じた。

「おい、また来たぞ。これで三人目だ」

「アンタが入り口をたくさん作りすぎたからじゃないか！」

「……しかし……そうでもしなきゃ、逃げる前にあいつらに喰い殺されるのがオチだ！」

「おいおい……今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ」

「他の二人は？」

「今ウチにいるよ」

「……ありゃ？ こいつは……」

「酷い怪我だ」

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.....

## 第11話　？暗雲立ち籠める暗闇の森？（後書き）

ども、Kyouneです（やっぱりユーザーネーム変えました）

今回はギル中心。で、やっと第2部に入りました。

今回も思い知らされましたが、やはりバトルシーンを書くのは苦手なようです。なるべく簡略化すると迫力が出やすいらしいですけど……精進します。

……ふと思ったんですが、「幻想のアルカディア」。略して「幻アル」？

で、いいですかね？

追記：今回は話の特性上、他のエピソードを挟むわけにいかなかったので、かなり短くなってしまうました。次の第12話でその分多めに書きたいと思います。

## 第12話 ? Unknown Darkness?

「いや……しかしまいったなあ」

辺りをきよろきよろと見渡す。本当に、俺はどこに来てしまったのだろうか。

カビ臭い小さな部屋の中、自分が寝かされていたベッドの上に座り、頭をひねる。

部屋は窓もなく、日差しも入ってこなかった。天井には唯一の明かりである電球が裸でぶら下がっており、カバーも何も掛けられていない。部屋は全体的にホコリが積もり、少し陰湿な感じがする。こんな所にずっといたら、不健康になること請け合いだ。

「どこだ……ここ……」

ぼつりと漏らす。何しろ、気がついたらベッドに寝かされていたのだ。

何だかこんな展開は前にも合った気がするが……目が覚めたら、このうえ更に異世界にいました、なんてオチじゃねーだろうな。頭の中に浮かんだ想像を振り払うように、俺は深く嘆息する。頼むから、これ以上事態をややこしくしないで貰いたいものだ。

e s s ?

第12話 ? Unknown Darkness

とりあえず、部屋にはドアがある。見たところ鍵もかかっていない。

ここで考えていても仕方ないと思い、俺はゆっくりとベッドから起き上がった。

「……っ」と

すると、ずきつと膝が痛む。未だに小刻みに震え、立つときに違和感を感じる。

あれだけ走り回れば当然か。少なくとも夢ではなさそうだ……。

ガチャ

突然、目の前の扉が開き、部屋に光が漏れ込んできた。

「……っ」と

その光を眩しく感じて、俺は反射的に目を細める。

扉の向こうには、ずっと前から姿の見えなかった奴がいた。

「エリイ……？」

「……あなたも、ここにいたのね。よかった、私だけかと思った……」

……

エリイはホツとしたように溜息をついた。心なしか、彼女の小柄な身体が少し震えて見える。

「お前、どこに行ってたんだよ。何でここに？」

「分からない。気がついたら、この隣の部屋で寝かされていたの」

「……そうか、じゃあ多分、俺も似たようなもんだな」

「ねえ飛鳥君、ギルは知らない？」

「ギル……？」

エリイは心配そうな顔で、俺に尋ねてくる。そう言えば彼女にとって、あの男は兄みたいなものなのだ。このか弱そうな表情は、きつとそれを心配してのものなんだろう。

「悪いけど、見てないな……。俺達があ的那天獣たちに襲われたときから、三人バラバラになっちまっただろ？ それ以降は……」

「そう……」

そう聞くと、エリイは少し寂しそうに肩を落とした。

「……にしても、ここはどこなんだ？」

「分からないけど……多分、地下じゃないかしら」

「地下？」

意外な言葉が出てきた。エリイは俺が寝ていたベッドにゆっくりと腰を掛けると、銀縁の眼鏡を細い指でかけ直した。

「ええ、私も気がついたらここにいたんだけど、目が覚めてから部屋の近くを少し歩いてみたの。ここ以外にもいくつか部屋があったんだけど、どの部屋にも窓が無くて、明かりは照明だけだった。それに太陽の光も差し込んでいないから……憶測だけど、ここは地下なんじゃないかしらって思うの」

「成る程ね……」

改めて辺りを見渡しても、確かに地下みたいな感じはする。

俺は深く嘆息した。一体何がどうなってこうなったのか……。

「……まあ何にせよ、ここに居たって始まらないな。……ちよっと外へ様子を見に行ってみるよ。連れてこられたって事は、必ず帰る方法があるはずだ」

そう言つと、俺は重い足を動かし、部屋の扉の方へ静かに歩いていった。

「あ……」

「ん？」

「私も……一緒に行く」

そう言つとエリイはベッドから立ち上がり、静かに俺の後に付いてきた。

その表情にはどこか不安が漂っている。こんな所に一人で居るのが嫌だったのか、姿が見えないギルのことを思うと居ても立っても居られなかったのか……それは分からないが、彼女はいつも以上に弱々しい感じだった。

「そうか……じゃ、一緒に行こう」  
頷くエリイを横目に、俺は扉を開けた。

「さて、どうする？ この男……」  
「まだ意識は戻らないようだが」  
「一応の応急処置はしておいたがな……」  
「正直、もうダメだろう。体中は骨折だらけで、何しろ出血が酷い。放っておいてもじきに死ぬよ」  
「……そうか、残念なことになったな」

「おい、大変だ！！ あの二人が居ないぞ……！」  
「！？」  
「さっき部屋を見に行ったんだが……少年も、その隣の部屋の少女も、どこにも見当たらない！」  
「まさか……外に逃げたんじゃないのか！？」  
「だとしたら……」  
「まずいな……」  
「……おい、お前らも来てくれ！ 外に出られる前に捕まえるんだ……！」

「ふう……」  
道をどんどん進んでいく。明かりがないので、殆ど壁に沿ってそ

ろそろと歩いていく。

岩の壁のひんやりとした感触が、手の平を通して心臓に伝わってくる。

「自然の地形を利用した地下通路みたいだな……それにしてもどこまで続くんだ……」

歩き始めて二十分ほど経った。岩場の道は狭い洞窟のようで、高低差が激しく、足場も安定しない。まるでアリの巣の中にいるようだ。歩いているだけで、想像以上に体力は削られていった。

「……………」

隣のエリイは無言のまま、暗闇の中ではぐれないように、俺の腕をしっかりと握っている。光がないので姿は見えないが、どうやらまだ怯えているらしい。

恐ろしいほどの静寂の中……ただただ洞窟を歩いていく。時間の感覚が、少しずつ失われていく。

「地上の近くにいるなら、日の光が差し込んでもいいはずなんだが……地下に居るんだとしたら、相当深いところに居るみたいだな……」

溜息をつきながら、深淵の空間を、俺達はひたすら進んでいった。

「おい、そっちは居たか!？」

「いや……見当たらない、どこかで迷ってしまっているんじゃないのか？」

「……………」

ぼんやりと、人の声が聞こえた気がした。洞窟の中で音が反響して、何重にも聞こえる。

「人が居るのか……？」  
ふと、考えた瞬間。

一斉に、天井に明かりが付いた。

「……うわっ……！」

突然付いた光に、俺は思わず目を閉じる。

「……照明……？」

隣ではエリイが、同じように目を細めながら天井を見ていた。  
天井には、光り輝く電球が電線で繋がれて、縦一列に何十個も羅列している。こんな所に照明があつたのか……全然気付かなかった。

だんだん光に慣れてきた目を開きながら、辺りを見回す。想像していたとおりの、洞窟のような狭い道だった。

「……にしても、電気がついたって事は……人が居るみたいだな」  
安心して、ホッと胸をなで下ろす。エリイも同じようだった。

流石にこれだけ長い時間暗闇の中に居るとな……。とは言っても、女の子の手前何とか隠していたが、俺も結構、不安ではあつたのだ。

「……あつ、いたぞ！ あそこだ……！」

遙か遠くで、背の高い男が見えた。後ろには何十人もの人が見える。久しぶりに人の姿を見た気がして、ようやく安堵した。

「よかった、人が居たか……あの、済みません。ここはどこで……」

「捕まえるおおおおおおお……！」

「すか………って、うええ……！」

ドドドドドドドドドド……

一瞬で捕まった。

「紐で、紐で縛れええ……！」

「いや、ちよつと……」

「絶対に逃がすなああ!!」

「きゃっ……いやああ!!」

「全員で包囲網を作れ! もう逃がさないからなあああ!!」

「えっ、ちょ、待つ……のわああああ!!」

……ちよつと待て。これ……どうなるんだ……?

T o B e C o n t i n u e d ……

## 第12話 ?Unknown Darkness? (後書き)

投稿遅れて済みません、ちょっと忙しかったもので……。

前回に比べて長くなっただのかわかりませんが……感覚で書いてるので、よく分かんねエです。

ちなみにサブタイトルの「Darkness」は「暗闇」って意味で使ってます。

サブタイトル症候群なもので……結構こだわります。

第13話　？「地底街」フォレスト？

「うわああああああん！！！」

「心配したぞ、お前らあああ！！！」

「無事で良かったあああ！！！」

「わーん！！　わーん！！」

「……………何なんだよ、この人達……………」

目の前で共に抱き合い、泣きじゃくる五、六人ほどの老人達。

何の事情も話されず、ついさっき、いきなりこの老人達に縄で拘束されてから早十分。俺とエリイはお互い手足をきつく縛られたまま、見たくもない老人達の泣きっ面を、嫌と言うほど拝まされていた。

「ハア……………」

いつまで経っても変わらない眼前の奇妙な光景に、俺はほとほと呆れて溜息をつく。すぐ横ではエリイが気だるそうな表情をしながら、細く冷たい目で彼らを見つめていた。……ああ、同感。俺だって同じ気持ちだ。

正直、ウザい。

「だーっ！ もう、何なんですかあなた達！！ いきなりこんな縄で縛って、何が『無事で良かった』ですか！ 説明してください！！」

堪らず怒鳴った。すると老人達は少し驚いたのか、泣きやんだ様子で——と言っても赤く腫れた目を擦りながらだが——次々にこっちを見た。

「何が……って……！」

「危ないだろう！！ 外のバケモノに食べられでもしたらどうするんだ！！」

一人の老人がそう言って再び目に涙を浮かべると、途端周りの老人達も、まるで連鎖反応を起こすかの如くわんわんと泣き始めた。

「私たちは知っているんだ！！ 外には怪物のような形をしたバケモノがいつぱい居て、うっかり外に出れば喰われて死んでしまう！！ この街の子供達も外に遊びに出かけたまま、二度と帰ってこなかったんだ！！ お前達をその二の舞にはさせたくないと思って、何が悪い！」

「……はあ……？」

この調子なのだ。縄で縛られ捕まってからというもの……この老人達は各々、泣き叫ぶか喚き叫ぶかしかなかった。この人達は……何故こんなにも号泣しているんだ？

何の情報も得られぬまま時だけが過ぎてゆく。ああ、段々イライラしてきた……。

俺はこのまま話をさせていてもラチがあかないと思い、当初の質問をこっちから切り出すことにした。

「まあ、よく分かりませんが……ここはどこなんですか？ 俺と彼女は、気付いたらここの部屋にいたんですけど……」

「ひつく……ああ、そう言えばまだ言っておらんかったな……」

老人は鼻水を吸りつつもようやく泣きやむと、服のポケットから取り出したハンカチで涙を拭くと、俺とエリイの手と足のロープを手早く解いてくれた。

「……ここは「ちていがい地底街」と呼ばれる地下の街、フォレストだよ」

老人は緑色のニット帽をかぶり直し、そう言った。

「いやあ、まあ何にせよ、さっきは手荒な真似をしてすまなかったね……。あ、私はこの街の町長をやっとる者だ。よろしく」

「はあ……」

その町長は、充血の引いた目でこつちを見つめながら、手を差し出してきた。皮の厚い、年季の入った手の平だ。……一応、握手をしておいた。

「それにしても、ここって……どこなんですか？」

「ん？」

「いや……俺達はただ、気がついたらここの洞窟の部屋に居たっただけなんです。何でこんな所に……？」

すると、町長は笑って返してきた。

「ああ……何というか……うん、ここは自然の地形を利用して作られた「裏の街」なんだ」

途端。その言葉が引き金になったかのように、今まで起こった全てのアンノウンが、頭の中で説明された。

「自然の……、——ああ、そう言うことが……そう考えれば……」

「？　どういう事？」

隣では、エリイが不思議そうな眼差しで俺を見る。

「ほら……この人達はさっき「外に出たらバケモノに喰われる」って言うってたたる。でも、ここが地下だとすれば「外」ってのは「地上」って事だ。で、地上にいるバケモノって言えば天界獣くらいし

か該当しない。

ってことは、今居るこの地下の洞窟は何本かの？ 出入り口？ が地上の地面か何かと開通してて、そこを通ることと地上とここを自由に行き来できる構造になってるんだ。でもって、俺はここに来る前に天界獣から逃げてたとき、偶然その？ 出入り口？ に入っちゃまってここに落ちて来た……。

で、落ちるときに打ち所が悪かったか何かで……それまでの疲労も相まって少し意識が飛んでた所へ、この人達が俺達を見つけて、介抱してくれていた……と見るのが一番自然なんじゃねえかな。実際、起きたときに何か頭痛かつたし」

「……………確かに……………そうね……………」

エリイが神妙な顔つきで眼鏡を直した。

「いや、その通りだよ……………」

後ろの町長達に混じっていた、一際背が高く若い男がそう頷く。  
「実は最初に町長さんが、倒れていたその女の子を見つけてね。そのすぐ後にキミが落ちてきたから……………大分疲れているようだったし、部屋のベッドで寝かせておいたんだよ。でも……………そしたらいつの間にか二人とも居なくなってたから、こっちは全員で大騒ぎだったんだよ。間違って外に出てしまったりしたら、きっとあのバケモノに殺されるに決まってるからね」

「……………そうだったんですか」

エリイが申し訳なさそうな表情で視線を落とす。

俺も少し、彼女と似たような感じになる。……………確かに最初こそびっくりしたものの、勝手に部屋を抜け出してしまっていたのが心配かける事になっていたとは……………これは、俺が悪いんだろうな。

「それにしても？？よく分かったわね、そんなこと……………」

「ん？ あー……いや、何となくな。こういうのは得意で……」

「……あつ」

突然、エリイが小さな声を上げた。

「そうだ……！ 私たちと同じくらいに、背の高い男の人が落ちてきたりしませんでした！？」

彼女は慌てて立ち上がった。恐らく、目が覚めてから一度も姿を見ていないギルが心配になってのことなんだろう。

確かに、俺達と同じ方法でここに落ちてきているのなら、ギルもあるいは……。

「背の高い……男……？」

「あ……もしかして、あいつじゃないか？」

途端、町長達の表情が暗くなる。

「確かに、酷い怪我をした金髪の男がちょっと前に落ちてきたよ……」

……

「！？ 本当にですか……！」

「ああ……しかし、あの男の怪我は？？、……私たちが出来る限りの応急処置はしたんだが………恐らく、もう……」

町長の言葉の渋りをどう捉えたのか、エリイの表情がみるみる青ざめる。両手で口を押さえ、小さな目には涙が浮かんでいた。

「……生きてはいるんですか……？」

「え？ ……ああ、まあ何とか息はしてたみたいだけど……」

言うが速いか、エリイは町長に飛びついた。

「ギルが居る部屋に連れて行って下さい！！ 私なら……まだ助けられるかも知れないから！」

今までとは打って変わった彼女の姿に、町長さん達は勿論、俺も少々たじろいでいた。エリイがこんなに焦るなんて……。

「ええ？ ……あの男を寝かせているのは、丁度その部屋だけど

……」

言い終わる前に、エリイは指を差された部屋の方へ走っていた。

??十五分後。

エリイはまだ部屋から戻らなかった。

以前にもこんな事はあった。シルファーとかいう資格者に襲われたときも、あいつは致死量の傷を負っていたはずだ。けど、エリイのあの怪我を治す力があれば、またきつと元通りに直るはず……。その時、俺はそう考えていた。

ギイツ……

静かに部屋の扉が開き、エリイが帰ってきた。心なしか、いつもより疲れているように見える。

「……治るんだろ？ この間みたいに」

何気なくそう聞いてみたが、彼女は顔を上げず、俯いたままだった。

「やっぱり、無理だったわ……新しく術をかけてから、日が浅すぎる……」

「……え？ どういう事??」

エリイは顔を上げないまま、まだ微かに青白く光の残るの右手を見つめたまま言った。

「私の治癒術は確かに怪我を治せるけど……この前ギルには体全体

に術をかけたでしょう？ 術が作用した部分は暫くの間、術に対しての耐性を持つてしまい、ある程度の時間をおかないと効果が殆ど無くなってしまふの。……今回はそれでも何とか最大限の術をかけて、一命は取り留められたけど……」

術やら何やらと聞き慣れぬ言葉が久しぶりに出てきたが、大体話の内容は理解できた。

「……その、また術が効くようになるまでは、どの位かかるんだ？」  
「分からないけど……二、三日じゃ厳しいわね……。今は非常に危険な状態だから、私はギルの傍で術をかけ続けなくちゃならないの。少なくともこの二、三日の間は、私はギルからは離れられないわ……」

エリイは重々しく溜息をついた。

彼女の小さな肩が、震えているように感じた。

??? 次の日。

結局、当然ながらギルは意識を戻さず、エリイは夜も寝ずにギルに尽きつきりだった。

俺は町長から借りた部屋で寝させて貰ったが、今もなお戦っている二人のことを考えると、あまり眠る気分にはなれなかった。

俺が居ても邪魔になるだけだろうと思い、今日は洞窟の中を少し調べてみることにした。

「外には出るな」と町長やその周りの人達からきつく言われていたので、今は天井の照明が照らすだけの、狭い洞窟をあてもなく進

んでいる。

もしうつかり外に出るようなことがあったら、また縄で縛られて泣き叫ばれる、みたいな事になりかねん。それだけは勘弁して貰いたいものだ。

?? そうですね、何故この人達は、俺達が危険に逢うことをあんなにも嫌がるんだろう???

そんな事を考えていたら。

「何だ、これ……」

偶然目が行った先、子供一人がやっと通れそうなくらい細い岩場に、梯子いしはの足のようなものが見えた。

「もしかして……ここからどっかに行けるのか……?」

妙にそれが気になった俺は、それを調べてみることにした。

そのままではとても通れなかったため、周りの小さな岩をどかし、何とか手を突っ込んで、その足を引っ張り出してみた。

靴の跡があった。

それも、同じ段差に数え切れないほど付いている。それは、誰かが通った形跡があるということだ。

遙か上を見上げると、?? うつすらと、日の光が見えた。

~~~~~

「よつこらせ……っと……」

一番太い枝に腰掛け、いつもの景色？を眺める。

周りで揺れる緑の木の葉が、いつも以上に揺れて感じる。

「ええ感じやなあ、やっぱりここが一番、空がよく見えるわあ」

流れる雲は、白いまま。

？？空には小さな、小鳩が一羽。

To Be Continued……

### 第13話 「地底街」フォレスト？（後書き）

第12話でページが増やせなかったので、今回の第13話はページ増量してみました。

次話から本格的に、第二章『フォレスト編』スタートです。どうぞお楽しみに。

## 第14話 ？光指す地上にて？

「……つく……」

一つ一つ、梯子はしこの階段を登っていく。

梯子は随分と古くなっているらしく、足をかける度にギシギシと木が唸った。

しかし、折れていたりするところは鉄のような金具で所々補強が施されている。どうやら誰かが長い間、この上に上るために使っていたようだ。

登り初めて早五分ほど。いい加減に手足が疲れていたところで、ようやく天辺に見える光が強くなってきた。

「やつぱり、地上に繋がってるんだ……」

町長や街の人からさんざん言われてはいたが、俺は上った先の場所がやけに気になり、梯子を登る手足を早めていった。

## 第14話 ？光指す地上にて？

「ふう……」

最後の階段に足をかけ、遂に地上に出た。

……が。

眼前に映った景色は、俺が想像していたものとは全く違っていた。

「何だ……ここ……？」

廃墟、廃墟、廃墟。

目に飛び込んでくる景色は全て、無惨に崩れ去った視界いっぱい  
に広がる廃墟だった。

辺りには沢山の民家の残骸が転がり、瓦礫から飛び出て、錆びた  
鉄の骨格が足元にごろごろしている。

青く光る空の切れ間、雲と雲の間から漏れ込んでくる日光が、そ  
の廃墟を朧気に照らし出していた。

俺は目の前の光景に異様さを感じ、首を回して端から端まで景色  
を覗き込む。

「一体、何が……」

「でやああああああああっつ！……！」

ガンッ！！

「……………！！！」

突然、後頭部に割れるような衝撃が走った。

「つつあ……………！！！」

いきなり襲った強烈な痛みに為す術もなく、俺は固い地面にばっ  
たりと倒れ込んだ。

「……………くっそー、いつの間にかこの場所までばれてもーとっ たんか  
……………」

後ろで微かに、人の声が聞こえる。

朦朧とする頭をふらふらと擡げると、視界の端にはぼんやりと、

いかにも重たそうな瓦礫の塊を持ち上げている少年が映った。

少年は鋭い目付きでこつちを睨みながら、鈍く光る瓦礫の先端を俺の頭に向けている。

「今もう少し殴つとけば、起きたときには忘れとるやろ……」

「は……！？」

ガンッッッ！！！！

頭に再び衝撃が襲いかかり、途端。

……目の前が、真っ暗になった。

「……ん……」

ゆつくりと瞼を開ける。

ずきんと後頭部に痛みが走ったが、俺はそれを押し殺してふらふらと立ち上がった。

「つてて……何があつたんだよ……」

目を擦りながら辺りを見回すと、気を失う前に見ていた景色と何ら変わらない廃墟が、佇むように広がっていた。

「……俺、どうなったんだっけ……。あー駄目だ、全然覚えてねえ……」

「あー！ 生きとるー！！」

急に後ろから、凄いいび声が聞こえてきた。

はっと振り向くと……そこには大きな焦茶色の樹がずっとそそり

立っていた。声の発生源を探そうとその樹を見上げると、天に届くほどの高い枝に、一人の少年が立っているのが見えた。

「しもたなあ……さつき完璧に殺せとらんかったんか……」

少年は悔しそうな顔をしながら、俺を睨み付けてくる……いや、今なんか凄い物騒な言葉が聞こえてきた気がしたが、ここはあえてスルー。

脳の奥底で消えそうになっていた記憶を見つけると、急に腹を締め上げるような怒りが込み上げてきた。

「あいつ……間違いない！ さつき俺を殴って気絶させやがった奴だな……！！」

「うっ、思いつきりバレてもーとるがな……」

少年の顔は日の光の逆光でよく見えなかったが、まずそんな声を漏らしていることは大体察しが付いた。

何の恨みで俺をぶん殴ってくれたのかは分からんが、とにかく事情を……。

「バレたからにはしゃーないな……お前にゃあ死んで貰うわ！！」

「……………はあ！？」

いきなり死刑宣告を喰らった。

少年はその枝から勢いよく飛び降りると、実に華麗な飛び方で、次々に枝から枝へと飛び移り、あっという間に地面まで下りてきた。少年と俺との距離は数十メートル。

しかし少年はまるでパンチを打つかのような格好で腰を沈めると、右の拳をぐっと握りしめた。

「死にさらせええ！！」

ジャラララララッ！！

次の瞬間。鎖が噛み合う音が響いたかと思うと、開かれた少年の手の平から、何十本にも分かれた大量の鉄鎖<sup>てっさ</sup>が凄<sup>こわ</sup>いスピードで飛び出してきた。

「な……！！！」

反応する間もなく、俺の右腕はその鉄鎖の一本に巻き付かれた。ぐるぐると何重にも回った鎖はがっちり腕をとらえて放さず、瞬間、相当の重みがのし掛かる。

「く、くそっ、何だこれ……」

俺が戸惑っていると、同時に飛び出した他の鉄鎖も俺をめがけて一斉に飛んでくる。

避ける間もなく、俺は残った左腕・右足・左足・首に一瞬で鉄鎖を巻き付けられた。

「……………！！！」

俺の身体を支える計五本の凶太い鉄鎖は、遥か遠くの少年の手の平と連結している。

どういふ手品か知らないが……、それでも急に鳴り始めた俺の危険信号は、確実に五月蠅さを増していった。

「ふんっ……………」

少年がそう力んだかと思うと、俺を縛り付ける鉄鎖は全体的にゆっくり上へと上昇し、あっという間に地面から数十メートルの高度まで持ち上げられてしまった。今ここで放されて地面に落ちたら、骨折じゃすまないだろうという高さだ。

首を何重にも締め上げる鎖に息が苦しくなる。それを何とかしようと藻掻<sup>もが</sup>こうとするが、同じように両手足も完全に拘束されているため、それもできない。

完全に、動きを封じられた。

「さあて、お前に恨みは無いけども、村のモンに知られた以上生かしておく訳にはいかんのや……………そっから落ちて死んでまえ！！！」

少年の言葉と共に、いきなり重力の感じ方が真逆になった。  
身体を百八十度回され、地面に頭を向けられたのだ。

やばい、やばい、やばい。

こんな高さから、しかも頭から落ちたら即死に決まってる。  
恐怖と焦燥の入り交じった感情が頭の中を支配し、だんだん緩く  
なっていく手足の鎖に絶望を覚える。

このままじゃ死ぬ……！！………何か………！！

そう思った瞬間、頭の中に、一つのセリフが閃いた。

「俺は、村人じゃねえええつつつ！！！」

叫んだ途端、鉄鎖が緩んでいくのが止まった。

視界に逆様に映る少年の表情は、たちまち驚きに満ちていく。息  
も絶え絶えに絞り出した言葉はどうやら届いたらしい。

よかった、？アタリ？か？？。

しゅるしゅると鎖は地面に向かって下がり、やがて俺を地面に降  
ろした。

バクバクと鳴り響く心臓の鼓動が痛い。俺はすぐには立てず、そ  
の場にぺたんと座り込んでしまった。

「……ホンマか？」

少年は未だ疑心暗鬼といった感じだったが、俺の方に近づいてき

た。

「……ああ、本当だ」

?? 本当さ。

ここで嘘をつこうモンなら、瓦礫に頭を打ち付けて死ぬことになるぜ、俺は。

T o B e C o n t i n u e d . . . .

## 第14話 ？光指す地上にて？（後書き）

投稿遅くなって済みません。

ちよいとパソコンの調子が悪くて……何日もうpできないままだったことをお詫び申し上げます。次回から新章とか言ってたくせに……orz。

それとお気づきになられたかと思いますが、今回は急いでうpしたかったために内容短めです。次回の15話では、是非？？！と、意気込んでみます。

こんな駄文に足を運んでくれる、読者の皆様に感謝です。

## 第15話　？コバト？

腕に絡まった重い鎖を、ぐるぐると回しながら外していく。

よくもまあ、こんなに雁字搦めにされていたもんだ。鎖は灰色に鈍く光り、皮膚に食い込んでいた箇所にくっきりと跡が付いている。

目の前の少年はさつきから俺のことをじろじろと、監視するように眺めている。

こいつはさつきからずっとこのままだ。（理由は不明だが）一度は俺を殺そうとしていただけあって、なかなか警戒を解いていない。俺はというと大した情報も持てぬまま……しかし胸の中にある一つの確信を抱きつつ、その少年を横目ながら視野に入れた。

## 第15話　？コバト？

その少年は、緑色に光る二つの瞳を持っていた。

年は俺より下で、エリイより少し上といった感じだろうか。全体的に小柄な感じで、服装はうつすらと土に汚れた半袖のＴシャツを着ており、頭にはバンド……と言うよりかは、鉢巻きのような灰色の帯を巻いている。

この、人のことを疑り深く探ってくる細い目を除けば、田舎の夕暮れ時に路地でサッカーボールでも蹴っていそうな、あるいはプラスチック製バットの素振りでもしてそうな、一人のやんちゃな子供に見える。

「ホンマにあんちゃん、よそから来た奴なんやな？」

「……ああ」

少年はさっきから俺の周りを行ったり来たりと、しつこくこの事を聞いてくる。俺はひりひりする腕をさすりながら、少年を諭すように話した。

「さっきも言ったろ。俺はこの？フォレスト？って街に住んで人間じゃない。お前と争う気はないし、争う理由もない。分かるだろ？」

「……………」

すると俺の言葉を聞いた少年は、小さな顎に手を当てて、何か考え込む仕草をし始めた。下を向いてうんうんと唸り、何かを思案しているようだ。

少年は時折辺りの廃墟を見渡したり、空を眺めたり、茶色の短髪をぼりぼりと掻いていたりもしたが、何十秒か経つと少年はすっと顔を上げた。

「分かった。ほな、約束してくれや。ワイはお前の言うとする事を信じる。そんなかわり……お前が下の街に帰っても、この場所や、ここにワイがおったことは、街のモンには言わんといて欲しいんや」

少年が話す聞き慣れない関西弁には少し戸惑ったが、言わんとしていることは勿論理解する。

「ああ、誰にも言わねえよ」

「……そうか！」

俺がそうきつぱりと返答すると、少年の表情は一気に晴れ渡った。

「ああ、ワイの名はコバトや。ここに住んどるモンでな。ま、よろしゅう頼むで」

「俺は……夏目 なつめ 飛鳥 あすか。しかしお前、何でもってさっき俺を殺そうとしたんだ？」

俺は比較的平らな瓦礫の上に腰を下ろす。するとその少年??コバトは、申し訳なさそうに笑いながら頬を掻いた。

「あー……その、なあ。お前も知つと思うけど、この街の連中、外に出るなつちゅーてにかく喧やかましいやろ? せやけどワイはこの場所が好きやから、下にあつた梯子はしこでちよくちよく登ってきとんねん。」

まあ、こっちにも色々事情があつてな? ワイが外に居つた事が街のモンにバレでもしたら、ワイは即刻この街を追放されちまうんや。で、さっきワイはてつきりお前が街のモンだと思つとつたから、こりやまずいと思つて……」

「頭にシヨックを与えて、上手いこと記憶を消そうとした訳か……」

「まあ……そういう事や」

小刻みに頭をへこへこと（軽くだが）下げながら、コバトはきまりが悪そうにしていた。

……俺はというとその話を聞いて、腹の底で収まろうとしていた怒りが再び燃焼するのを感じた。

思わず、怒鳴る。

「っ馬鹿かテメエ!! あの高さを頭から落ちたら、記憶が無くなるどころか命が無くなる所だろうが! 最初だって、俺は瓦礫で頭をぶん殴られたんだぞ!？」

「いやあ、だからすまん言うてるやろお……」

「すまねえよ! 助かつたからいいとはいえ……記憶を無くすために瓦礫で殴るわ鎖で縛つて落とそうとするわって、どんな無茶だよ!？」

「ああ……うん。ま、まあ結果オーライや。生きとつたんやから、ええやないか」

「いや、ええやないか、じゃねえよ……!」

そこまで言つたところで、俺は急に脱力してしまった。こっちは理不尽極まりない理由で殺されかけたというのに……。

？もつ、これ以上言っても仕方ない？。

脳天気苦笑する目の前の彼を見てみると、嘆息混じりにそう思わざるを得なかった。

……俺もどうかしてるな。頭打っておかしくなったのか？

「もういいよ……。ところで……」

話を切り替え、俺は辺りをぐるっと見渡す。

？？変わらず佇む廃墟。

「ここ、どうしてこんな廃墟なんだ？」

「……………」

ずつと気に掛かっていた事を切り出した。

しかしコバトは少し俯くと、苦笑しながらすぐに答えた。

「ここはな、昔の？フォレスト？なんや」

「……？ 昔の、とはどういう事だ？」

「せやから……今ある地下の街は、新しく作られた？フォレスト？なんや。昔はここに本来のフォレストっちゅう街があったんや」

するとコバトは少し遠くを見るような目で、語り出した。

八年ほど前やったな。

今この場所には、そこそこ活気があった小さな街、フォレストがあった。

街のモンも少ないし、生活が豊かなわけじゃなかったけど。みんな笑いあって、楽しく過ごしてた。

辺りは木々に囲まれとったからあまり目立たん街ではあったんやけど、だからこそ街のモンには、お互いが家族みたいな繋がりがあった。

ワイもこの街が大好きで、沢山の友達と一緒に、楽しい毎日を送ってた。

みんなこの毎日が、終わるわけない思ってた。

せやけど、そんな毎日が終わったのは、突然やった。

街は、襲われたんや。

見たこともない？化け物？やった。この世の生き物とは思えん程の、バカでかいのが何十匹も襲ってきた。

そいつらにワイらの街は一瞬で潰され………沢山の街のモンが、殺された。

まだ子供だったワイは、訳も分からずその状況に圧倒されとったのを覚えとる。

何も分からないまま、自分が生まれ育った大切な街を、人を、そいつらに壊され殺されていく所を、何もできずに逃げ回ってた。

結局、街は完全に崩壊し、今みたいな廃墟になってもうた。

これが今から八年前の出来事や。

でも、ワイも含めて街のモン達は諦めとらんかった。

みんなで街を復興させていこう言うてな。また位置から街を作り直したんや。

せやけど、街はまた襲われた。

今度は前よりも多い、ごつつ多い化け物を連れて来て。

また、大勢の人が殺された。

前と全く、同じ光景やった。

けど、街のモンは絶対諦めんかった。

何度でも、何度でも、街を作り直しては襲われた。

我ながら、襲われると分かってて何で街を生き返らせとったのかは分からん。

せやけどそうまでするほど、みんなこの？フォレスト？に希望を

持ってた。

でも、とうとう限界が来た。

街は破壊され尽くされ、街のモンにもとうとう絶望が沸いてきた。  
でも、諦めることだけはできん。

ほんなら、どうしたかつちゅうと……。

？地下？に、新しい街を作ったんや。

それが？「地底街」フォレスト？の始まりやった。

T o B e C o n t i n u e d ……

## 第15話 ?コバト? (後書き)

更新遅れてごめんなさい。

まだパソコンの調子が完全ではなく、ちよくちよくしか書けない始末。

今度完璧に直しておきます。

一話の長さがまちまちですね。今回の15話はまた若干短かったよ  
うな気が。

執筆フォームが違っているので、書いてる文字数がわかんねーです。

## 第16話　？「危機」の予感？

——つまり、一通り話を纏めるとこういう事だった。

？フォレスト？は元々、地上にあった。

しかし幾度かの被害を受けたため、街は崩壊寸前となってしまうた。

そこで打開策として街の下の地盤を掘り進め、広大な面積の空間を地下に造り、住民はそこに移り住んだ——。

そして、今ある？「地底街」フォレスト？が、そこにある。

街の経緯を一通り話し終えたコバトは、ふと懐かしそうに辺りの廃墟に目をやった。

——そうか。この廃墟は地上にあった頃の、？前フォレスト？の亡骸<sup>なきがら</sup>なんだ。

考えてみれば「フォレスト」って言葉が、あの地下に似合うとは思っていなかったが。……それはこういう経緯だったのか。

それに、今はお世辞にも「街」とは呼べないフォレストを「地底街」と呼ぶのだって、前の街の名残なのかもしれないな。

「ま、そういう訳でな。地下に移り住んでからちつとばかり不自由にはなったけども、みんな楽しくやっとなねん。

さすがにあのジジイ共の過保護には閉口するがのお。街が潰されて子供がぎょうさん減ってからうちゅうもの、みんな口うるさく『地上には出るな』言うてくんねん」

……やはり潰された前の街のことを話すのは少し辛かったのだろ

うか。コバトは笑いながら、しかしどこか俯きがちにそう言った。

あの村人の人達が口うるさく言ってくる言葉も、今になって理解できた気がした。

「でも……何でだ？」

「ん？」

「何でお前……そんなことを“俺に”話したんだ？」

俺はふと、素朴な疑問をぶつけた。

そりゃあこの廃墟を目にしてその経緯は気になったものの、過去のことまでつつこんだ経緯を、今初めて会ったばかりのこいつは何故俺に話そうと思ったんだろう。

コバトは少しだけ首を捻っていたが、すぐに即答した。

「何やるな、お前とは初めて会うけども、他人事のような気がせえへんねん。………何かオマエにやあ、話しておきたかった。それだけや」

コバトはそう言うのと、にかつと歯を見せて笑った。

………何だかな。こいつ。

「ほな、ワイはもう地下<sup>した</sup>に帰るでえ。あんまり長いこといて、感<sup>ず</sup>ずかれでもしたら困るしのお」

「………そうか。じゃあな」

そう言うときコバトは、あちこちに散乱した瓦礫を飛び越えるように去っていった。

さて。俺も戻るかね。何だかエリィとギルが心配になってきた。

「あつ……何処に行つてたの？」

「え？ まあ、散歩だよ」

「……そう」

地下に戻ると、寝泊まりしている部屋の前にエリイが一人ではつんと座っていた。その重苦しい面持ちから、どうやらギルの容態は変わりないらしい。

……何と声をかけて良いのか分からない。彼女は昨日からずっとあんな状態だ。

外に行つた事は喋らないほうが良いだろう。廃墟の事もあって、何だかとてもなく心配されそうな、そんな気がする。

彼女は大きな溜息を一つつくと……その可愛い服についた埃りを軽く払い、すつと立ち上がった。

「私も少し歩いてこようかしら。と言っても、外には出られないけどね」

「あ……ああ、そうするといいよ。ずっと考えてたつてしょうがないもんね」

「そうね。じゃあ頼ん……」

彼女がそう言いかけた直後。

ふと、エリイは歩きだそうとしていた足を止めた。

「……………」

「？ エリイ？」

「ちよつと……静かにしてて……」

そう言つて、エリイは口の前に人差し指を立てた。俺は訳も分からず押し黙る。

沈黙が、響く――

「……やっぱり、気のせいかしら」

一分ほど経ってから、彼女はそう小さく呟いた。

「気のせいって……何が？」

「うっん、何でもない。……私、やっぱりもう少しここに居ようかしら。ギルの身体も心配だし」

そう言つと、エリイはまた元の場所に腰を下ろした。

――何だかな。さっきのコバトといいエリイといい、よく分かん事ばかりだ……。

「……よつこらせ、やっぱり地下は狭く苦しくて嫌になるのぉ……」

コバトはそう嘆息すると、自室の部屋のベットにダイブするように飛び込んだ。

うっすらとかぶっていた埃が一気に舞い上がり、ひとしきりちらちらと舞った後、また静かに床に積もる。

「……………」

何となく、すぐ横の机の上を見る。

机は木で造られた簡素な物だが、その上には――一枚の写真が入った、額縁があった。

「もう、八年前のあんな事は繰り返したらアカンのや。ワイがしっかりせにやあな……」

その写真に写っていたのは、一人の少女。  
そして……一羽の白い鳩。

---

——それから、時間は流れた。

ここは地下だ。当然、地上の光は射してこない。  
何時から何時間経ったのかも分からないが……そろそろ瞼が重くなってきた。多分に、いま外はもう夜なんだろう。やはり地下だとかういったことが分からず不便を感じる。  
そんな訳で俺、夏目飛鳥は……とっとと眠りについてしまおうと、借りている部屋のベッドに身を投げ込んだ次第である。

「何か……今日は色んな事があったな。  
昼間は天界獣に襲われるし、こんな地下の街に紛れ込みまうし、ギルは倒れるし、変な関西弁の奴に出会っし……」

そこまで考え、ふと口から大きな溜息が漏れた。

……頼むから、これ以上の厄介事は勘弁して欲しいもんだ。こっちは非日常の適応にも、まだまだ全然慣れていないというのに……。

頭の中に浮かび上がる懸念事項を振り払うように、俺は枕にぼすつと顔を埋めた。

……まあいいさ。ギルの意識が戻り次第、ここの街とはお別れさせてもらおう……。

そして俺は、眠りを乞うように瞼を閉じた。

——けど。

分かってた筈なんだ、そんな事は。  
今までの俺の『非日常』の経験も、なかなか無駄だったもんじゃない。

分かっていた筈だった。

“危機”は何の前触れも無く、ドアを叩いてやって来るものだった。

## 第16話　？「危機」の予感？

——その夜、俺は彼女の叫びによって。

まだ満天の星が浮かび上がる夜空の下に飛び出していく事になる  
うとは……この時はまだ、知る由も無かった。

To Be Continued……

## 第16話 「危機」の予感？（後書き）

お久しぶりです、Kyouneです。

パソコンの執筆ソフトの調子が最悪で……長らく更新できませんでした。失礼致しました。

今回完全に修復しましたので、以降は普通に描いていけるとおもわれます。

あ、今回は少し短めだったと思いますが……展開の都合上、仕方がありませんでした。次回は、早ければ今日中にupできると思うので。

それから、パソコンが使えなかった為に今回は携帯電話で執筆していたので、慣れずに文が不自然な点があるかもしれませんが、ご指摘いただけると有り難いです。

……展開の特性上、いつも僕が書いてる「本編上のサブタイトルの配置」を後ろのほうに置いてみたんですが、たまにはこういうのもいいな。

後書きなのに長々と……失礼しました。

第17話　？悲劇の地鳴りは夜長に笑う？

「……ん……」

——それは、夢の淵から呼び起こされるような感じだった。

ベッドに潜って安眠をとっていた筈の俺の身体は、しきりに左右へと揺すられていた。

隣からは、誰かの必死な声が聞こえる。

「……お……て……」

ん……何だ……？

「お……きて……！」

「起きて、飛鳥君……！」

「うわっ！」

ドサッ！

いきなり、ベッドから叩き落とされた。……冷たい石の床が、やたらと頬に凍みる。

「……って……何だ一体……」

まだ意識がはつきりしない頭をがしがしと掻きながら、俺はゆ

つくりと立ち上がった。

だが、そんな俺ののんびりとした行動に焦りを感じるかのように、隣では聞き覚えのある声在必死に叫びをあげていた。

「大変なの飛鳥君！ 今すぐ来て！！」

「……え？」

隣に居たのは、エリィだった。

彼女は俺の服の袖を掴みながら、その小柄な身体で引っ張るようにして精一杯俺を急かしている。見た感じ、めちゃくちゃ慌ててるっぽい。

——が、当然俺には事情がさっぱり飲み込めず……。

「どうしたんだ？ 何か——」

「今この街に？？大量の天界獣が向かってきてるの！！」

寝ぼけていた俺の頭は、その一言で一辺に目が覚めた。

う？

第17話   ？悲劇の地鳴りは夜長に笑

「？？？な、何だそれ……」

思わず言葉を漏らす。聞き覚えのある単語に、無意識に背筋が吊り上がるのが分かった。

「どういう事だよー！」

「分からない……でも、見えるの！ 確実に結界の中に進入されてきてる……！」

相変わらず意味不明な物言いだが……今は事情を把握する方が先だ。俺はエリイの両肩をがしつとつかみ、慌てる彼女を落ち着かせようと試みた。

「……とりあえず、一回整理させる」

「あ……ごめんなさい」

しゅんと静まる。

「まず、？見える？って何だ？ お前には外から来てるっていう……その天界獣らが来てるって事が分かるのか？」

そう聞くと彼女は、まだ軽く肩を上下させながらだが、途切れた言葉を繋ぎ合わせるようにして話し始めた。

「うん……。まだ言ってなかったと思うけど、私は無意識に、自分の周囲一定の範囲に特殊な？結界？を持つてるの。その結界の中に天界獣またはそれに準ずる物が進入した場合、どれだけ距離があっても、結界の内側であればそれらが？見える？ようになる。私はその結界と目をセットで所持していて、その感覚にも気づけるの。」

結界は大体1？半径まで届いてるから、私が気づいた時間から考えて、もう奴らは多分ここから700メートルくらいの地点まで来てると思う……」

息荒く話し終えた彼女は、その白い肌に汗の玉を浮かべていた。

……成る程。相変わらず物理的根拠を全く無視した話ではあるが、分かったことはある。

要するに彼女は自分から半径1？の範囲内であれば、天界獣達の気配に気づくことができる。そしてその姿を遠くからでも確認できる。

昼間のエリイも、もしかしたらあのとき既にうつすら感じるくらいの感覚があつたからなのかも知れない。

「とにかく、貴方はすぐにここの街の人達を逃がすの手伝って！  
敵の数は天界獣が三十体以上なの！ この町なんてすぐに潰され  
ちゃうわー！」

彼女は必死に俺を連れ出そうとしているが……ふと、俺の頭に疑  
問が浮かぶ。

「でもここは地下だぞ？ そう簡単には見つからないと思うし、そ  
れならここに隠れてた方がよっぽど安全なんじゃ……」

そう、昼間のコバトの話からしても、地下に移住してからの方が  
レストがそれ以降の被害を受けた様子はない。それなら？？。

「いえ……多分、バレてるわ」

「えー？」

彼女は、俺の言葉を遮るようにそう言った。

「私達が地下にいるって事ぐらい、もう分かっているとと思う。」

元々アルカディア社の目的は、貴方やギルのような？資格者？を  
殺すこと。奴ら？？『帝』は、私が天界獣らを気づけるのと同じよ  
うに、奴らも私達の存在に気づくことができるの。けど私達？資格  
者？が一度にこの「地底街」に集中してしまったことで、逆に奴ら  
からも気づかれやすくなってしまったんだわ……」

「そ、そんな……」

落胆に駆られ、体中の力が抜ける。

「けど、どうするんだよ！ 今は夜中だから街の人達はみんな寝て  
るだろうし、そもそもこんな複雑な地形の地下を歩き渡って、奴ら  
が到達する前に全員を外に避難させるなんて不可能だ！！ この  
全員が殺されちまうのだって時間の問題だぞ！！」

「分かっている……けど、今私達にできることは、一人でも多くの街  
の人達を逃がすことしかないじゃない！」

「……………」

彼女の口調が少し荒くなる。

静寂で無機質な部屋の中に、その声が反響しながら響き渡る？？。

??まいったな……。今こうしてる間にも、天界獣と帝は刻々とこっちに迫ってきていると見て間違いない。  
焦燥から、唇がどんどん乾いていく。思考が……パニックになっていく。

??その時だった。

ドゴオオオオン!!

「!?!?」

急に、物凄い地鳴りが聞こえた。……どこか聞き覚えのある轟音に、俺の心臓はまたドキツとする。

「なあ……今のって……」

「……天界獣の足音と見て、間違いないでしょうね」

聞きたくなかった答えだった。

「ハア……ハア……!」

?彼?は荒く息をしながら、目の前の光景を愕然と見渡す。

思えば今日は珍しく、中々寝付けない夜だった。

夜風を浴びようとここに来ただけ。

いつもと変わらぬ、満天の星空。

それに満足し、地下に帰ろうとした途端。

突然の気配を感じ??。

振り返った先には……大量の、怪物。

怪物・怪物・怪物・怪物・怪物??。

見渡す限り、それしか移っていなかった。

彼にとってもこの異常な景色は、その脚を震えさせるのに十分すぎる理由だった。

何より、過去のあの光景とダブって仕方がない。軽い吐き気を感じる。

??けど。

彼は拳を握った。

自分の身の丈の何倍もある怪物を、それもこんな狂った数を、どうして自分が止められるというのだろうか。

分らない。

明らかに無謀だ。

誰が見ても明白だ。

だが。

?彼?には、拳を握ることしかできなかった。

「相手になつてやるで……街のモンには、ぜつてえ手エ出させへんからなアー!」

？彼????コバトには。

---

俺は狭い地下の中を、必死に走り続ける。

エリイからは一人でも多くの人を起こして、一カ所に集めるように言われた。地上には既に天界獣が到達してしまっているからして、上にも下にも逃げ場はない。それなら街の人の知恵を借りて、どうかそれ以外の脱出口が無いかが知りたいらしい。

それ故俺はこの洞窟のような通路をかけずり回り、誰か街の住人と会うべく必死になっているのだ。

……が、何にせよ地下だ。

アリの巣の迷路のように複雑なこの地形を、俺は???ぶっちゃけ、さつきから同じ所を行ったり来たりしているだけだろうなーということとはうすうす感ずいていた。

「……だーっ! どっちがどっちだー!」

堪らず叫びを上げる。その声は洞窟の中を駆け抜けていったが、この大声で地下の全員が起きてくれればいいのにと、無謀な望みを浮かべてしまう。

……完全に迷ってしまったらしい。

「はぁ……………」

とうとう、これ以上闇雲に走り回っても仕方がないと思い、その場で足を止めてしまった。

「くっそ、誰の部屋にも行けねえ……つか、ここの住人達は何でこんなに地下をややこしく造っちまったんだよ……」

確かにこの地形は、相当住み慣れた者でなければ確実に迷ってしまっただろう。……俺が特別方向音痴な訳ではない。

「畜生……どうすりゃいいんだよ……」

刻々と迫り来る死刑執行を、ただ待つ事しかできない死刑囚のような気分だ。

早くしないと、もう地下にも踏み込まれてしまっただろう。そうなれば一巻の終わりだ。

「……くそっ!!」

ドカツ!

??どうすればいいのか分からず、俺は思わず目の前にあった岩の壁を殴りつけた。

じーん……。

……痛かった。拳に鈍い衝撃が走る。

しまった。アニメとかだと結構普通にやっていたりするけど、実際はこれってやるとすっごい痛かったのだ。なにやってんだ俺……。

??ガラッ

「……?」

??ふと、今しがた殴りつけたばかりの壁を見る。何かが崩れたような音が響いた。

そこには??。

「……この梯子はしは……」

そこには、岩と岩の切れ目の間に現れた、見覚えのある梯子があった。

昼間使った……地上<sup>うえ</sup>へ登るための移動手段。

この梯子の存在を知っているのは……思い当たる限り一人しかない。

ドゴオオオオオン！！

ふと、上で衝撃が走った。

嫌な予感が絶えないのは、拳の痛みのせいではないだろう。

T o B e C o n t i n u e d ……

第17話 ？悲劇の地鳴りは夜長に笑う？（後書き）

ども、K y o u n eです。

次回から、いよいよヒートアップです！ お楽しみに！！

今回のタイトルは……ミクのオリジナル曲に詳しい人なら、「おつてなるかもしれませんね（「ハイ。ンスナン。ンス」とかね）。

## 第18話　？その一瞬？

「……つく……」  
一つ一つの梯子はしをゆつくりと掴みながら、俺は少しずつ上へと昇っていく。

遥か上の地上から響いてくる衝撃は段々と強くなってきたおり、両手両足の四点のみで垂直に支えられている俺の身体は、今より強烈な衝撃が伝われば簡単に吹き飛ばされてしまいそうだった。

——何故、今俺はこの梯子を昇っているのだろっ。

地上へ行けば異常な数の天界獣がいる。そんな事は分かっている筈なのに。

そんな所へ俺なんかがおちおち出て行けば、一瞬で殺されるのが目に見えているであろう筈なのに。

それでも俺の両腕は、今より上の梯子を掴むことに必死だった。

あの少年が。コバトがいるかもしれない。

その？希望？——或あるいはこんな状況だからこそ、誰かに助けを求めたい？不安？や？孤独？を持って。

俺は、梯子を登り続けた。

「着いた……」

最後の梯子を登り終えた時——？その光景？は俺の目に、実に簡単に飛び込んできた。

「何だよ、これ……」

目を疑う。これが……この世の光景なのか。

到底信じられない。また、俺も今までの人生でここまで狂氣的な光景を記憶した覚えは無かった。

「ゲギヤアアアアア！」

「ガアアアアアア！」

「キキキキキキ！」

何十体もの天界獣……と思われる生物も含め、俺の視界はそれらによって埋め尽くされていた。そいつらの悍ましい咆哮が、まるでコーラスのように重なり合い耳をつんざく。

中には今までに見たことのあるタイプの——ヘドロの塊のようなもの——もいたが、ちらつと見た経験のある？人型？。更に上空には、まだ見たことのない大型の怪鳥のような姿をした空を飛ぶ化物までいた。

その数、見た限り三十……いや、少なくとも四十体はくだらない。

「……………！」

——ふいに、突然俺の身を？恐怖？が襲ってきた。背筋にぞつと悪寒が走り、一気に汗が出て来る。

初めて見た時の？驚き？のほうが大きかった為か。それを理解し、恐怖する方が遅れて来たようだ。

人間とは不思議なもので、それがどんなに？恐怖？を感じる対象であっても、それへの理解が追いつかない限り畏怖する事などないのである。

知らない物には、怖がりようが無いんだ。

つまりその光景は俺にとって、？恐怖？だとか？畏怖？だとか、そういうレベルをとくに越えていたわけで。

——そして、理解する。

俺は知っている。あの天界獣が、たった一匹でどれほどの強さを持っているのかって事くらい。

それが、この異常な数。

分かってるからこそ、俺の身体は……震えが止まらないんだ。

## 第18話　？その一瞬？

「……ゲ？」

ふと、一匹のヘドロの塊タイプの天界獣が、首をゆっくりとこちらに向けた。恐らく俺の気配を感じたのだろう。

その視線は、地上に出てきたばかりの俺の方に向き……

「ゲギヤアアアア！！」

気付かれた。見事に視線がバツティングしてしまった。

しまった！……と思っても時既に遅し。その天界獣は凄い速さで転がるように走りだし、咆哮をあげながら俺の方へと突進した。た。

この時ばかりは、？資格者？として生まれてしまった自分を恨まざるをえない。俺の足は震えて少しも言うことを聞かず、その場からぴくりとも動けなかった。

「——っ！！」

一瞬で、突っ込んできた天界獣の大きく開いた口が目の前に迫る。俺は完全に腰が抜けたまま、迫り来るその光景を黙って見ている

事しか出来なかった。

やばい、逃げられない——！

ジャラララララッ——！

「うらああああっ——！」

視界の片隅で、どこかで聞き覚えのある音と声が聞こえた。

瞬間、俺の右腕は一本の鎖でぎゅるっと搦め捕られ、その途端、急激にそっちに引き寄せられた。

「うわあああ——！」

凄いスピードで地面を引きずられ——と言うよりは、地面を掠<sup>かす</sup>るようにすっ飛びながら——気がつくと、誰かの足の下で停止していた。

……背中がひりひりする。

「……ってて、一体なん……」

「アホか——！ お前何でこんな所に居<sup>お</sup>んねん——！」

俺が訳も分からないまま背中を摩<sup>さ</sup>るのと同時に、すぐ隣から息を

切らした怒声が聞こえてきた。

びっくりして上を見上げると——そこには、両の手の平から鈍く光る鎖をぶら下げた少年、コバトが立っていた。

「お前、今ワイが居らんかったらアイツに喰われて死んどったんやで！？ 無茶苦茶やらかすんもええ加減にせえ！！ ドアホ！！」  
彼はぜえぜえと肩で息をしつつ、俺の右腕に絡まった鎖を強引に引つ張るように解いた。

俺はというと——今回はぐさま状況が理解できた。

「……助けてくれてありがとう。やっぱりここにいたのか……」  
一応礼を言いつつ、やっと街の住人に会えた安堵から溜息を漏らした。

「お前、昼間に会った……確か飛鳥とかいう奴やったな。何でここに……！」

「悪いが、それについて今説明してる隙はない。それより何処かこのフォレストの地下から、離れた所まで移動できる隠し通路って、お前知らないか！？」

「はあ！？ 何を言うてるん——」

コバトがそこまでいった途端、俺の視界は再び濃い影に覆われた。

「ゲギヤアアアアア！！」

今度は三体の天界獣が同時に、覆いかぶさるように俺達に突っ込んで来たのだ。俺は話しに夢中で、周りに全く注意が行っていなかった。

「うわあああつー！！」

「……今はこいつらを何とかすんのが何より先決やな。飛鳥！ ワイから離れるなや！！」

すると؟؟コバトの握った両手の拳が強い緑色に光り出した。  
そこから先は、一瞬の出来事だった。

「ふんぎっ……!!」

精一杯？溜め？を作るように上半身を後ろにのけ反らせ、それに比例するように彼の両拳に宿る光も強くなる。

「……でりゃああっ!!」

次の瞬間、コバトが握った拳を離すと同時に何十本、いや、何百本にも別れた大量の鉄鎖が、二つの手の平から重なり合うようにして放出された。

その鎖はそれぞれ一本ずつが斜めに重なり合い、お互いがお互いの交点を接続するようにして……。

最終的に一瞬で形作られた物は、それは漁業で魚を取るときに使われる地引き網のような、巨大な一つの？網？だった。

「……？蜘蛛の網？オ!!」  
スバイダース・ネット

網は目の前に展開された。鎖はまるでそれ自体が意志を持っているかのように、襲い来る天界獣達を一瞬で包み込む。

「これで三体ヤッ……!!」

網はすぐに閉じ、丸まったまま地上にドスンと落下した。中に閉じこめられた天界獣は苦しそうに藻掻もがいて網に爪や牙を立てるが、鉄鎖はびくともしない。どうやらあの鉄鎖は想像以上の強度のようだ。

何故人間の手の平からあんな鎖が出てくるのか……初めてあったときも驚いたが、その理由が分からないほどそろそろ俺だってバカじゃない。

こいつ??コバトは、ギルと同じ？資格者？だ。

「ふう……危なかったでえ……」

コバトは俺の横で額の汗をぐいっと拭った。とりあえず今の天界獣の3体は確実に捕まえてしまったが、眼前に映る残りの数は減ったのか減っていないのか分からないほどだった。安心するにはまだ

早すぎる。

「おいお前！ 今ならまだ間に合う！ ワイがこいつらの氣を引くから、その内に地下に逃げえ！！」

コバトは息が上がったままそう叫んだ。

……しかし、俺はその言葉に従うことはできない。この絶望的な状況を、一体どうやってこいつに説明したらいいのだろうか。俺はよろよろと立ち上がると、切り出しにくくも？それ？をコバトに伝えた。

「……駄目だ。こいつらには地下にも街があるって事がバレてるらしい。今さら地下に逃げ込んだって、袋の鼠にされるだけだ！」

「な、なんやと……！！」

絶望的な表情を浮かべ、こちらを凝視するコバト。？？そうさ、俺だって何が何だか分からないんだ。いきなりこんな化け物の大群に前触れもなく襲われたってだけで、俺の頭はどうになっちゃうまいそうで？？。

「……ほんなら、どないすんねん！」

「今残されてる方法といえば、この街の地下からどこかに脱出できる方法がないかどうかだけが……」

「そんなもんワイは知らんで！ どっちにしろ、今から下のジジイどもを呼びに戻ったんじゃあ、こいつらに地下に進入されてしまっやろ！！」

「……くっそ……どうすりやいいんだよ！！」

絶望に駆られた心境で、俺はがつくりと膝を落とす。

万事休す。最後の頼みだった希望も、ここに来てとうとう潰<sup>つぶ</sup>えてしまった。

だが。

コバトは違った。一切の落胆なく、目の前で唸る天界獣達に拳を向けている。

その眼差しからは？絶望？こそ浮かべど、？諦め？などは微塵も

感じられなかった。

??すると彼は齒を食いしばりながら、小さくばそつと漏らした。

「もう二度と……こいつらに殺される奴らなんて見たくないんや…

…」

「え？」

その言葉は、よく聞こえなかつ……。

ドスッ

??一瞬。隣で、鈍い音が響いた。

振り返ると。

「……………は？」

コバトの身体が??血塗れで横たわっていた。

膝に力が入らないまま、その身体を恐る恐る覗き込む。

彼の身体には……右の下腹部にテニスボールくらいの大きさの風穴が空き、そこから止めどなく鮮血が溢れ出していた。何かで刺されて貫通したような傷跡だ。

あまりにも一瞬過ぎて、何が起こったのか分からない。

コバトは、ピクリとも動かなかった。

「……………!!」

本来であれば、その光景に俺は？恐怖？を覚えるのだろう。

だが、俺は何故かそれを感じることはなかった。

理解できないからじゃない。過程はどうあれ、この惨状を俺はしっかりと理解していた。

それなのに？？俺は一向に、恐怖に戦くことはなかった。

逆に、身体を熱い感覚が、支配していくのが分かった。

何故か、頬を涙が伝った。

その正体は俺にも分からない。

けど俺は？？この後に起こった事をきつと、生涯忘れることはないだろう??。

「うわあああああああああああああああ……!!」

俺は、狂ったように叫んだ。

何故叫んだのかは分からない。

目の前の惨劇に、怒りを感じていたわけでも無い。けど、身体が無意識に叫んだのだ。

??その一瞬。

ドクンッ!!

血が沸騰するかのように熱くなるのを感じた後。

俺の右手には??

いつか見た、一本の刀が握られていた。

??これが。

?資格者?として生まれ、今までその運命を確たるものとし得なかった彼が、初めてその力の片鱗を見せた瞬間であった。

夏目飛鳥。

彼はこの時を境に、その呪われた運命の渦に巻き込まれていくことになる??。

T o B e C o n t i n u e d . . . . .

## 第18話　？その一瞬？（後書き）

K y o u n eです。18話、如何だったでしょうか。

やっと主人公にスポットを当てられる時が来ました。連載18回目に  
にしてやつとです。

最後に三人称を挟んだけど、これでよかったのかな？  
では、これからよろしくお願いします。この瞬間からが彼の物語  
の、本当の意味での始まりです。

第19話 ？アルカディア社「帝」地帝ガンドラ？

身体が、焼けるように熱い。

——けど、周りは凍ったように静かだ。

自分の心臓の鼓動だけが、やけに響いて聞こえる。

余計な感情が引いていくような——。

何だ、これは。

？

第19話 ？「アルカディア社「帝」地帝ガンドラ」

「……………」  
ぼーっとしたまま、右手の刀を見る。  
いつか、何処かで見たことがある、朧おぼろな月明かりを跳ね返し、鋭く光る日本刀。

——あの夜見たものと、同じだ。

「……………」  
けど、俺は…………どこか焦点が合っていないような目で。  
虚ろな感情で、？それ？を見ていたような気がする。

「……………」  
何も言わぬまま、何も考えぬまま。  
ただただ、？それ？だけを見ていた。

「ゲゲ……………」

ふと、こちらが何もしてこないのに痺れを切らしたのか。さつきと同じようにまた複数の天界獣が、唸り声を上げながらこちらを睨み付けてきた。

「ゲギヤアアアッ！！」

「……………」

「……………」  
「ゲギヤアアアッ！！」

「……………」

——だが、どれだけそいつから激しく威嚇されても、俺はまるで気にも止めなかった。いや、むしろ耳に入ってすらこなかった。心が身体を捨てて出て行った後のような抜け殻の如き感覚と、静かに、ふつふつと胸の奥に込み上げてくる不思議な感触。それだけが、この時の俺の全てだった。それ以外の事なんて、俺の世界には無かった。

自分でも、俺が誰だか分からなかった。  
そいつらが何なのか、分からなかった。

「ギヤアアアッ！！！」

途端、五体ほどの天界獣がもの凄いスピードで、俺を目がけて突っ込んできた。あまりにその動きが速かったのだろう。俺と天界獣の間の距離は、一瞬で目と鼻の先まで縮まってしまった。

俺は——普段であればその光景に戦慄く所だったが、今はそんな感情さえ沸かない。何も感じず……ただただ、冷たく冷え切った瞳でそれを傍観していた。

逆に、それ以上の冷たい感情で。

——そいつらの方に振り返りつつ……俺は無意識に、右手の刀を振った。

ドクンッ！！

「ゲ……………!!」

再び、血が沸騰するような感覚を感じた後。  
襲ってきた天界獣達は……

大量の鮮血と共に、全員が宙を舞っていた。

「ゲギヤアアアアツ……………アアア……………アツツ……………!!」

苦しそうな悲鳴を上げ、血を吐き出しながら、ドシャドシャと次々に地に堕ちていく。

「……………!!」

その光景を見てやっど??俺は意志を取り戻し、初めて、それを確認できた。

虚ろだった精神が、<sup>「コロ」</sup>身体に戻っていく感覚を感じる。

血に染まった視界を目の当たりにし、青ざめると同時に息を飲んだ。

何だ、これは。

「……ちつ、面倒くせエな。こんな時に能力に目覚めちゃうなんてよオ」

「え？」

ふと、奥の方で野太い声が聞こえた。  
聞き覚えはない声だ。誰だろう。

「まあいい。もう一人の方は殺ししまった事だしな。次はテメエだ」  
「……………な!!」

瞬間。声が聞こえていた奥の方から、途轍もなく巨大な岩の塊が  
砲弾のようにぶっ飛んできた。

「な、何だ!？」

岩は凄い速さで、螺旋回転を描きながら俺の方へ向かってくる。  
途中の軌道上にいた天界獣達はその岩石に巻き込まれ、苦しそうに  
身を引き裂かれていく。……ちよつと待て、何だいきなり!?

「死になア!!」

「うっ、うわあああつ!!」

思わず目を塞ぎ、迫り来る岩石を直視できず目を背けてしまう。

???が、次の瞬間。

スパンツと小気味良い音がしたかと思うと、目の前まで接近して  
きていた岩の塊は、真つ二つに切断されていた。それはもう包丁で  
ジャガイモを切ったときのように、見事に。

二つの半月状となった岩石は断面の間で俺を避けるように通り過  
ぎ、遙か後ろで轟音を立てて粉々に砕け散った。

「……………は!？」

「ちつ、こいつじゃ殺せねエか。面倒くせエな」

俺が事態について行けずに汗をダラダラ流していると……。

声が聞こえる奥の方から、さっきのような巨大な岩石が何十発も、さながら流星群の如く大量に飛んできた。周囲にいた天界獣は危険を察知したかのように、一目散に避けだした。

「オラオラア！ こいつならどうだア！？」

「いや、な、なんだよこれ！！ ちょっと待って……！！」

言うが早いか、俺は震える腰を無理矢理立たせ、さっきの光景を回想のように思い出す。

？？思い出せ！ さっき俺はどうやって……！！

「……ん？」

すると、ふと、右手に握っていた細身の日本刀が視界に入った。

……俺はいつの間にかこんな刀を持っていたんだろう。皆目見当は付かないが……だが、さっき起こった光景を説明するには、今はこれぐらいしか思い浮かばない！！

「……だああああっ！！」

俺は悪あがきをするように、右手に握っていた刀を目の前で無茶苦茶に振り回した。

まるで小学生がテレビのヒーロー番組を真似ているようで情けなかったが……この時の俺には、これしかやる事がなかったのだ。

？？すると、どうだろう。

視界にはいま刀を振った軌道がそのまま強調されているかのよう  
に、ぼんやりと薄い緑色に光る流線が、あちらこちらに鋭く宙を舞  
った。

「……………！！」

その光る流線に触れた岩石はことごとくズタズタに切り裂かれ、やがて破壊されていく。そんな光景が目の前で何度も何度も、流線と接触した岩石全てに行われていくのだ。

俺はとことん理解が追いつかなかったが……

「……あれ？ これって……」

一つだけ？ 感づいた事？ があった。俺の予想が正しければ、この刀は……。

途端、宙に放たれた流線に運良く触れず、原型を保っている岩石が数個、俺の方に向かって引き続き凄い速さで飛んできた。

「やっべ……！」

だが俺はさつきよりは落ち着いた心持ちで……右手に握っていたその刀を強く握りしめると、野球のバットを持つように肩に構えた。

「……うらあっ……！」

叫ぶと同時に、力の限り刀を振り切った。

……しかし、俺はさっきの？ 感づいた事？ を試す意味でも、少し変則的な振り方をしてみた。

その軌道はバットでボールを打つときのような直線的なものではなく、目の前で螺旋を描くように円形に振り切ったのだ。

すると……俺の思っていた通りの事が起きた。

「やっぱり……」

今度は、目の前でグルグルマークのように、さっきの光る流線が何重にも螺旋回転を描いて浮き出た。それは回転を加えつつ、眼前でどんどん幅を増やしながら大きさを増していくと、やがて俺の視界を埋め尽くすかの如くバカでかい大きさとなった。

「いっけえええええっ……！」

俺の身を守るように？ 盾？ となった平面上の渦は、向かってきた岩石に触れると同時に一瞬で切り裂き、粉に変えてしまった。

「……やった……」

安堵して、がっくりと膝から座り込む。

「ちっ、おいおい何つう能力だよ……。マジか」

——だが、向こう側からは変わらずあの野太い声が聞こえて来る。状況からして今の岩石は、十中八九あの声の主の仕業だろう。

俺は何とか口を開けると、まだおぼつかない心臓を抑えるように口を開いた。

「誰だ、お前……」

すると奥の暗闇から……。満を持してというように、一人の大柄な男がのっしのっしと現れた。

「ちっ、まだ覚醒したばかりのガキだが……。とりあえず、名乗っておいてやるか……」

そう言つと男は——低い声で言い放った。

「俺はアルカディア社の？帝？、ガンドラ！！ てめえら？資格者？を殺しに来た！！」

大地が、揺れるのを感じた。

過去に聞いたその言葉に——俺の右手は、無意識に強く？それ？を握り返した。

T o B e C o n t i n u e d ……

## 第19話　？アルカディア社「帝」地帝ガンドラ？（後書き）

ども、K y o u n eです。

二人目の帝、登場です。物語はどんどん佳境へ……って感じですね。飛鳥の能力にもご注目。そして次回から、あの人の過去も明らかに……。

最近、創作意欲が凄いのので一日一話ペースで更新出来てます。パソコンが壊れてた時の反動ですかねww。

こんな駄文をいつも読みに来て頂いている読者の皆様には、本当に感謝しております。

## 第20話　？地岩砲（オーガ）？

その男——ガンドラと名乗った大男は、闇夜を纏った暗闇からゆつくりと現れた。太く骨張った指で首筋を荒く掻きながら、もう一方の手で力強い握り拳を作っている。

アルカディア社の「帝」——。あの夜のシルファーが、無意識に脳裏に浮かぶ。

俺はその男の姿を確かに視界に捉えながら、流れる空気の冷たさを、その身で感じていた。

### 第20話　？地岩砲<sup>オーガ</sup>？

俺がそいつを見て初めて感じたことは、まずその身体の大ささだ。身長は二メートルを優に越え、それに比例するようながつしりとした肉体。なみなみと盛り上がった筋肉が示す二つの怪腕は、さながら瓦割りなど尋常じゃない枚数を容易に行えてしまいそうだ。

また奴の服装も、その筋肉を余計に強調しているように見える。上半身は何も身につけておらず、何重にも割れた腹筋と広い肩幅が露出している。下半身も膝までしか丈がない荒々しい感じのもののため、実質体中の筋肉が殆どあらわになっている状態なのだ。

こんな奴、少なくとも俺は今までに類を見たことがない。あの拳で一度でも身体をまともに殴られようものなら、最低でも骨折は免れないだろう。

「……おい、何をボケっとしてやがる」  
「……」

奴——ガンドラは低い声で、そう静かに言い放った。ドスの効い

たその声色に、俺の背筋は無意識に吊り上がってしまう。

だが、俺は後退しようとした自分の膝をしつかりと押さえ付け、奴に対抗するように腹から声を搾り出した。

「さっきの岩石……おまえの能力ちからだな」

察する。ただの人間にあんな馬鹿げた真似ができる筈がない。だとしたら……いや、アルカディア社の「帝」というだけで当然とも言えるが、奴もまた？能力ちから？を持った？資格者？なんだろう。

すると、奴はどこかこちらを馬鹿にするような仕種で軽く鼻を鳴らした。その図太い腕を後ろに向け、自分が背負う奥の空間を指す。  
「そうとも。気付かねエか？」

「？ ……！」

俺ははっとして、奴の腕が指す方を見た。

ガンドラの後方は暗いのと硝煙とで見づらかったが、俺は何とか目を凝らして覗き込んでみた。

……すると、闇夜の中から現れたのは――

「……大砲？」

それは、岩石で形作られた、一つの巨大な？大砲？だった。

その大砲は戦艦に搭載されているような軍事的なものではなく、地面から直接生えたような形で存在していた。それも一般的に知られる黒光りするようなものではなく、ただ巨大な岩石の固まりを削り出して大砲を形作つたような、荒唐無稽な感じだ。

口径の大きさ的にも、さっきの岩石の砲弾はあれによって射出されていたと見るのが最も自然な思考だろう。

するとガンドラはその大砲を撫でるように、俺に向かって言った。  
「こいつは？地岩砲オীগ？つてなあ。俺がこの地面にちつとばかりし手を加えて作り出したモンだ。根を張った地面から下にある地層を？」

弾丸？に変え、撃ち放つ。まあ一発でもまともに喰らえば、粉々になっちまうだろうなあ」

奴の背丈の倍以上あるその大砲は、砲身を変えることなくどつしりと佇んでいる。

俺は――思わず息を呑んだ。

「さあ、お前も今すぐコイツの砲弾で木っ端微塵にしてやるぜ。見た所てめエのそのバツジは強力そうだが……能力に覚醒したばかりじゃあ、まともに制御もできねエだろうが」

そう言つとガンドラは少し屈んだ姿勢を取り、その太い腕で地面を掴んだ。

「……喰らいなア――！」

「――！」

……ゴゴゴゴゴゴ……！

すると、急に大きな地鳴りが辺りに鳴り響いた。

それはガクガクと下から突き上げるような感じで、その波動が全てあの巨砲に向かっていつている感じた。

「何だ、これ……！」

言いかけた直後、ガンドラの隣に座る巨砲が、低い唸り声を上げた。

次の瞬間。

ドゴオオオン――！！

「――！」

特大の砲弾が、俺を目掛けて飛んできた。

さっきの奴の更に何倍もある、視界を埋め尽くすほどのものが。

「……うわああっ!!」

俺は素っ頓狂な声を上げ、咄嗟に足を後ろへ向けた。右手に握っていた刀の事は覚えていたが、すぐにそれを振ってどにかしようと思える程、俺は勇気ある人物でもなかった。

理性より本能が優先し、目の前の驚異から逃亡する事を選んだのだ。

——しかし。

「……え」

ふと、両足に違和感を覚えた。

「何だ、これ……!」

後ろへ向けた筈だった足が、ぴくりとも動いていない。

再び動かそうと思って足に力を込めても、びくともしないのだ。

「……!!」

その違和感は足のすねを伝い、膝を越え、腰まで感じるようになった。

冷たい感覚が、俺の足を支配する。

——土の匂いが、ふとした。

俺はやつと気づき、自分の足元を凝視する。

「枷<sup>かせ</sup>……!?!」

それは、土でできた枷のようなものだった。地面から直接生えるようにして伸びたその茶色い枷は、俺の両足を何重にも複雑に絡め捕り、血管が浮き出ん程にギリギリと締め付けている。

完全に、動きを封じられた。

退路を絶たれたという事実が、焦燥となって俺の脳裏にのしかかってくる。

「……動けねエだろうが。??死になア!!」

「——ッ!!」

ドッゴオオオン!!!!

強烈な激痛が、全身に響いた。

目の前が真っ暗になり、骨の軋む音が鈍く耳に響く。

辺りの空間を疾駆する衝撃波と、飛び散った岩石の欠片が宙を舞う。

強烈に遠くなっていく意識の中で、俺はそれらを薄らいだ視界の端に捉えることしかできない。

重力の感じ方が、一瞬一瞬で転がって??。

俺は、地に伏せた。

-----

「???ん」

暗い。

何だ。

ここは何処だ。

誰か明かりを??。

跳ねるように起き上がると、背骨の辺りに鈍い激痛を覚えた。  
一瞬戸惑ったが、すぐにそれが何かを思い出す。

ああ、あいつだ。忌々しいぜ。

やられっぱなしは性に合わねエ。とつとぶっ殺しにいつてやり  
てエが……。

??やめた。ここがどこかは分かんねーが、……口惜しいが今は  
身体が無理っぽいな??。

ドゴオオオオオオンン!!!!

……ん? 何だこの振動。……上?

あれ……エリィは?

その時、遙か地下で。

?彼?は立ち上がった。

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.....

## 第20話 ？地岩砲（オーガ）？（後書き）

ほんつとくに申し訳ございませんでした。

長らく休載してしまつて……。ちよつと群馬に里帰りしたら、うっかりインターネットが使えなかったモンでして。一ヶ月近くも次話投稿が遅れてしまつた次第であります。

今回は実験的だったので少し短めになりましたが、近々筆記のスタイルを一人称から三人称へ変えようかと思案中であります。どちらがいいんでしょう……。

第21話 ? memory of Kobato - ? 「在りし日」 ?

痛い。

コバトは地面に倒れたまま、何とか繋ぎ止めた意識を保つことに心血を注いでいた。

腹の辺りの違和感が、酷く身体の芯まで突き刺さるような痛みを与える。

ぼやける視界を必死に探り、痛烈な痛みを歯を食いしばって耐えるが、それもいつまで続けられるか分からないほど身体がダメージを受けているのは分かっていた。

下にできた自分の赤い血溜まりが、背中 of 服にべったりと張り付き、夏場の汗のような不快感を感じる。

けど、そんな事は言ってられないほど事態が切迫しているのも、コバトはその震える頭で感じ取っていた。

ワイが倒れとって、どうするんや——……！

—————

「——ん？」

ガンドラは、急に遠くから強い気配を感じた。

さっき倒した筈の奴とはまた違う、途切れそうな程か弱い鼓動。遠くの、深い暗闇の中から。

「何だ、生きてやがったのか」

暗闇に声を放ると、荒い呼吸に遮られながらも小さく声が返ってきた。

「——……当たり前や。……お前だけは止めんと、ワイは死んでも死に切れん……！」

「ヘッ！ バカな野郎だなア。そのまま死んだフリでもしとけば、

助かってたかも知れなかったのによオ」

「……バカはお前や。それじゃあ街のモンが皆死んでまっやる……」  
体中から地に血を滴らせ、何とか口を動かす。  
しかし。

無常にも、ガンドラの隣から地面が崩れる音が響き渡った。

「？地岩砲？……」

崩れる地面から現れたのは、目を見張らんばかりの巨大な大砲。

「……………！！」

口を開き愕然とするコバトをよそに、ガンドラは目を閉じてこう  
言い、次の瞬間全身に力を込めた。

「そういう考えを——？バカ？つつうんだよ……！！」

ドオンッ！！

ガンドラの隣の？地岩砲<sup>オーガ</sup>？が咆哮を上げると、途端に周囲の空気が  
震撼するように激しく震えた。

そして、その巨大な砲身から。飛鳥に放ったその一回り大きい  
サイズの、岩でできた大砲の弾が轟音を立てて発射され、コバトの  
眼前に一瞬で迫るかの如き勢いで接近してきた。

「……………ッ！！」

あかん、身体が動かん。

直感的にそう感じてしまったコバトの身体は、今まで必死で動か  
してきたその膝と共に限界を迎えるように、軋む音を立てながら遂  
に崩れ落ちてしまった。

「くっそ……動かんかいアホがつ！」

脇腹から滴る血で真っ赤になった自分の膝に怒鳴りつけるが、最  
早膝は生気を無くしたように、一歩も動こうとはしてくれない。

「く……………！！」

コバトの頭に、焦燥が募る。  
眼前まで迫る、視界を埋め尽くすほどの巨大な大砲に、圧倒される。

ワイは、死ぬんか——。

いや、ワイは死なん。

死んだらアカン。

せやったやろ。

アイツとの約束や。

こんな所で破るわけにはいかへんねん。

ワイは、絶対——……！！

「死ぬわけには、いかんのやああああーっ！っ！っ！」

――――

それは今から八年前。

あるところに？森林街？と名を冠する小さな街、「フォレスト」があった。

「おい、今週は野菜が安いよ！」

「はっはっは、今日も大漁だ！」

「酒足りねエなあ、もっと持ってこい！！」

「いい加減にしなよアンタ！ もうこれで何杯目だい！！」

「堅エこと言うなよ！ 今日は仲間と一緒に飲みに行くんだ！」

周りを多くの樹に囲まれたこの街に、響き渡るような人々の笑い声。

街は小さくはあるものの活気はあり、そこに住む人間は毎日を楽

しく過ごしていた。

そんなフォレストの、街外れの一角――。

「いつてええー!!」

一人の少年の叫び声が、毎日のように聞こえてくる家があった。

「何すんだこのジジイ! 人の頭をサンドバックみてーにブン殴りやがって!!」

「やかましい! またお前は近所の子供と喧嘩してきおって!! 一体何度言ったらお前は大人しくなるんじゃ!!」

「仕方ねーだろうが、先に手エ出してきたのはあいつらなんだぞ!」  
家の中には一人の小さな傷だらけの少年と、頭から湯気を出すように怒る一人の老人。

その二人はお互い取っ組み合うようにして、畳四畳ほどの狭い家の中で暴れ回っていた。

「そんな事は関係ないわい! お前にやられたご近所さんの子供の親が、今朝方ワシの所まで凄い形相で苦情を言いに来たんじゃぞ! ? ワシは申し訳なくて平謝りじゃったわい!!」

「だっかつら! 俺はハルがいじめられてたのを守ってやったんだって! それでいじめてた奴らを仕返しにブン殴ってやっただけなんだよ!」

「だからといって殴らんでもエエじゃろうが、この悪ガキが!」

二人はお互いの頬をつねったり殴り合ったりしながらひとしきり暴れていたが、やがて疲れてぜえぜえと肩で息をするようになると、自然に大人しくなり床に倒れ込んだ。

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……」

丸太を組み合わせて作られた部屋の壁に、少年と老人の荒い息が響き渡る。

二人は暫く微動だにしていなかったが、やがて老人よりかは体力の回復が早いのであるう少年の方が、額に汗を浮かべながらもよろよろと立ち上がった。

「くっそ、このジジイ……老いぼれのくせに……!」

すると壁にもたれ込んだ老人の方も、顔を青くしながらも言葉を発した。

「む……老いぼれとて、お前のようなガキを肅正させるだけの力は残つとるわい……」

「肅正つて何だよ!? 俺は何も悪い事はしてねーって言ってんだろぅが!」

そう呆れるように怒鳴った少年の方は、「やってられない」とばかりにずんずんと部屋の扉の方へ歩いていった。

木を削りだして作られた取っ手を荒々しく握ると、少年は老人の方を向かないまま言葉を発した。

「……ハルんとこ行ってくる」

「こら待たんか! まだ話は終わつとらんぞ!」

「うっせえジジイ! てめエはせいぜい盆栽でもして、残り少ない余生を楽しんでやがれ!」

そう言い放つと、少年は扉を引きちぎらんばかりに強引に開け、ボタンと閉めると急ぐように家を飛び出していった。

額に溜まった汗を振り払うようにすぐさま少年は走り出したが、その場から離れきれないうちに家の中より、あの老人の怒気が混じった大声が聞こえてきた。

その言葉は、少年の足を本能的に止めかねないものだった。

「お前は夕飯抜きじゃからな、コバトーツ!」

八年前。

コバト、七歳。

第21話      ? m o m o r y      o f      K o b a

t o - ? 「在りし日」 ?

「ふう……」

街の外れに位置する自宅からやつと離れ、走ってきた少年——コバトは、いつのまにか街の中心街に来ていた。

周を見渡せば街の人々で溢れかえっていたが、通りすぎる人達は揃ったように「またコバトか」と呟きながらそのまま通っていた。その中心にいるコバトは熱くなつた身体を冷ますように、着ていたTシャツをパタパタと扇がせるが、それでは収まらないほど身体は既に火照りきっている。

それもそうだ。頭の中の怒りにまかせるままに、ここまで走ってきたのだから。

「しかし……あのジジイにも困つたもんだな。あの老化しきつたアタマはどうにも融通がきかないらしい」

コバトは七歳という幼い年齢と、それを体現するような小さな身体つきとは裏腹に、まるで大人がするような渋いポーズで、腕を組んだままうんうんと唸っていた。

しかし、コバトはふと当初の目的を思いつくと、すぐさま街の東——大きな時計台が見える森の奥まで、さっきまでは震えるように疲弊しきっていた足を無理矢理動かし、走っていった。

「……着いた」

走り始めて十分ほどで、目的地に着いた。

そこは街の中心街とはまた離れ、周りをさらに深い樹に囲まれて  
いる孤立した土地。

日光が真上からしか差し込まないため、他の場所に比べると若干  
薄暗い。

そしてその中の眼前に佇むのは、視界いっぱい広がる、巨大な  
白い壁？。

「……相変わらず、でかい家だなあ」

だが、コバトはそう嘆息した。

さらに視界を上げて見上げると、真っ白に塗られた巨大な時計塔  
が見える。

その時計台の基盤となる屋上から下には、幾つもの上品な窓を持  
った部屋の壁。

それは、全面が白塗りの大きな？屋敷？。

端から端まで歩いていたら足が痛くなるほどの広さで、広大に広  
がる敷地の中に佇むその屋敷は、どこか外界との接触を拒むかのよ  
うに周りを樹で覆いながら存在していた。

そう、眼前に立ちはだかる白い壁は、壁ではなく？塀？であった。

だが、その屋敷には一つの不自然な点があった。

それは、？人の気配が全く感じられない？ということ。

周りは薄暗いというのにどの窓からも明かりは漏れておらず、建  
物からは生気が感じられない程に、どこか薄気味悪ささえある。

だがコバトはその屋敷に駆けながら歩み寄ると、すぐ近くにある  
部屋の、一階の窓の下まで行った。

身長が足りないため窓の冊子には手が届かなかったが、コバトは近くの茂みの中から大きな梯子はしこを引っ張り出すと、それを登って窓まで進んでいった。

「よっ……と」

窓を覗き込むと、そこには。

「よっ！ ハル、相変わらず不幸そうな顔してんなあ！」

一人の少女が、座っていた。

To Be Continued……

第21話 ? m e m o r y o f K o b a t o - ? 「在りし日」 ? (後書き)

ども、またまたお久しぶりです、K y o u n eです。

今回からコバト過去編突入と言うことで、全部で3〜4話くらい使  
つてしまつかもしれませんが、あしからず。

……というか、高校生活が忙しくて、なかなかキーボードが打てま  
せんorz。

第22話 ? m e m o r y o f K o b a t o - ? 「春と小鳩」 ?

「よっ」

「……………」

コバトは窓を覗き込みながら、ガラスの向こうに映る一つの人影に向かって声をかけた。

窓の向こうの部屋の中はしんと静まり返り、昼間だというのに明るさも感じられない。その人影はそんな虚空間の中に、人形のようにひっそりと座っていた。

「おい、ハル」

コバトは二度、人影に向かって声を投げかけた。

すると人影はその声にようやく気付いたのか、ゆっくりとコバトの方を向いた。

そして小さく息を吐くのと同時に立ち上がり、人影は……。

「ハル、またき……」

「こんの、アホがあああっ!!」

滅茶苦茶に、怒鳴った。

第22話 ? m e m o r y o f K o b a t

o - ? 「春と小鳩」 ?

「……………つてええっ!!」

地面の上で、脳天を押さえながら転がり回るコバト。そしてその様子を、上から鼻を鳴らしながら睨みつける一人の少女。

激しい一筋の閃光が走った次の瞬間には、景色はもうこれに変わ

っていた。

その少女は、「フォレスト」の市民が着ているような普段着とは懸け離れた絢爛さを持つ可愛いワンプースに身を包み、少し大きめの麦わら帽子を被りながら窓に手をかけていた。

少し色の黒い肌に、癖がある長めの黒髪を風になびかせ、黒く大きな瞳で少女はコバトを見下げる。そしてコバトの頭を直撃したその右腕の拳には、猛獣のようなオーラを纏った気迫があった。

「つく、てめえ何すんだハル！　せっかく遊びに来てやったつてのに！！」

コバトは頭に大きなコブを作りながら、上の窓から頭だけ出している少女に抗議の声を上げた。

しかし少女はそんなコバトの声を打ち返すような凄い剣幕で、逆に怒鳴りつける。

「やかましわ！　いつも梯子から登って来るんはノゾキやから、やめえ言うとするやろうが！」

「誰もてめーなんか覗く訳ねえだろうが！　この暴力女！」

「何やと！？　女の子に向かってなんちゅう口聞いとんねん、このクソガキが！！」

二人はお互い大声を上げながら、ぎゃあぎゃああと騒ぎ立てた。ここが街から離れた森の中でなければ、確実に近所から苦情が飛んでくるくらいの大声で。

口論は暫く続いていたが、やがてコバトは数十分前の同じような喧嘩、またここまでずっと走ってきた体力の消耗も相まって、先に息切れを起こしてしまった。

次第に肩で息をするようになり、腰を芝生の上に着く。こういう喧嘩の途中で自分から戦線離脱するのは、何だか相手に負けたような気がして悔しいのだが、そうも言ってられないほどにコバトは少々疲弊しきっていた。

このまま口論を続けても、どうせあの女には言い負かされるのがオチだろう、と思ったからだ。

「……っはあ。ああ、疲れた……」

額に汗を浮かべながら窓を見上げるコバトに対し、少女は高みから少し勝ち誇ったような表情を浮かべた。

コバトはやはり不機嫌な顔になったが、反面、少女はこれまでの口論を楽しんでいたかのように少し笑うと「ところで」と話を切りだした。

「なんや、あんた何でまた来たん？」

「……お前、さっきそこら辺のガキに何か言われてたじゃん。……ちよつとだけ心配だったからよ」

「……………」

その言葉を聴いて、少女はさっき浮かべた笑顔を少し曇らせた。が、次の瞬間にはまた

「……何や“そこら辺のガキ”で。お前も十分ガキやないか」

と、同年代の子供に比べて少し身長が短めのコバトへ塩を塗り込むような一言を放っていた。

「なっ……っせーな！　そういう事じゃねーだろ！」

「それにアタシの事が気になったかて一日に二回もこんな辺鄙な所へ来るなんて、お前も大概変わり者やのお」

「てめーっ！　それが客に対する態度か！」

コバトはまた声を張り上げるが、上から見下ろす少女の猛烈な毒舌には敵わず、しばらくすると再び地面に座りこんでしまった。

「……なあ、コバト」

それから数分。コバトがすっかり上がってしまった息を鎮めていると、不意に少女が口をゆっくりと開いた。

その口調はさっきまでの剣幕のような激しいものではなく、どこか曇った感じの声色で。

「ん？」

「ホラ、お前今日はあそこ、行かんのか？」

少女は、窓の外をぴんと指さした。

人差し指の先端が示す場所は、周りの森よりも一際目立つ、一本の大きな大樹。

そこは、コバトにとっても少女にとっても、行き慣れた場所。

コバトはやつと引いてきた額の汗を袖で拭うとすつと立ち上がり、腰に両手を当て、言った。

「……しよーがねーな。連れてってやるよ」

—————

「大丈夫か？ ハル」

「心配すんなや。……よつと」

コバトは雑草が生い茂る草むらを少女よりも先に抜け、ハルと呼んだその少女を、手を引くように引つ張る。

ハルはその手に引かれながら、背の高い雑草の壁を、その細い足を上げて通っていく。

二人が進んでいるのは、屋敷から少し離れた小さな山。

そこへ行く道のりは町中よりも荒れているため、粗悪な生え方をした草木やごろごろと転がる石が後を絶たない。コバトは、後に続くハルの行く手を遮る雑草を時々横に蹴飛ばし、道を作りながら進んでいった。

「……しかし、アタシも情けないもんやな。こんなガキにエスコートしてもらわんと、マトモに外も出歩けんとはな」

ハルは小さくため息をついて、そう言葉を漏らした。しかしコバトは、

「ふん、そんな事気にすることねーよ。それに、俺はもうガキじゃねえ」

と、少し強がったように言う。

そのコバトの姿が、精一杯背伸びしているのがバレバレで。それが何だか可笑しくて。

ハルは、くすつと笑った。

—————

「……着いたぞ」

歩き始めて十数分。

コバトとハルは、目的地、屋敷の窓から見えた大樹の麓ふもとに立っていた。

燦々と太陽が照りつける中、ハルは額に汗を浮かべながら、不規則に肩で息をしていた。その小さな肩胛骨が、白いワンピースに汗で張り付き浮き彫りになっている。

「……大丈夫か？ 無理に来なくてもよかったのに……」

そんな疲れて見える彼女をコバトは心配し、背中に手を当てながら声をかける。しかしハルは「にっ」と齒を見せて笑うと、その手を払いのけるように立ち上がった。

「なに、ちよつと疲れただけや。それよりホラ、今日もあそこまで連れてつてくれ」

ハルの視線の先は、大樹の天辺。地上から数十メートルはくだらないその高さは、見上げれば首が痛くなってしまう程だった。

コバトはハルの疲れかたを見ると少し怪訝な表情を浮かべたが、すぐに彼女の両手をとって自分の腰に回すと、ハルを体におんぶさせる形で大樹に手をかけた。

「よっしゃ、落ちないように、しっかり掴まってるよ」

コバトはそう言って気合いを入れると、少しずつ、大樹を登り始めた。

To Be Continued……

第22話 ? memory of Kobato - ? 「春と小鳩」 ? (後書き)

時間がねエ……orz

進められなくてすみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1905j/>

---

幻想のアルカディア

2010年10月10日17時35分発行